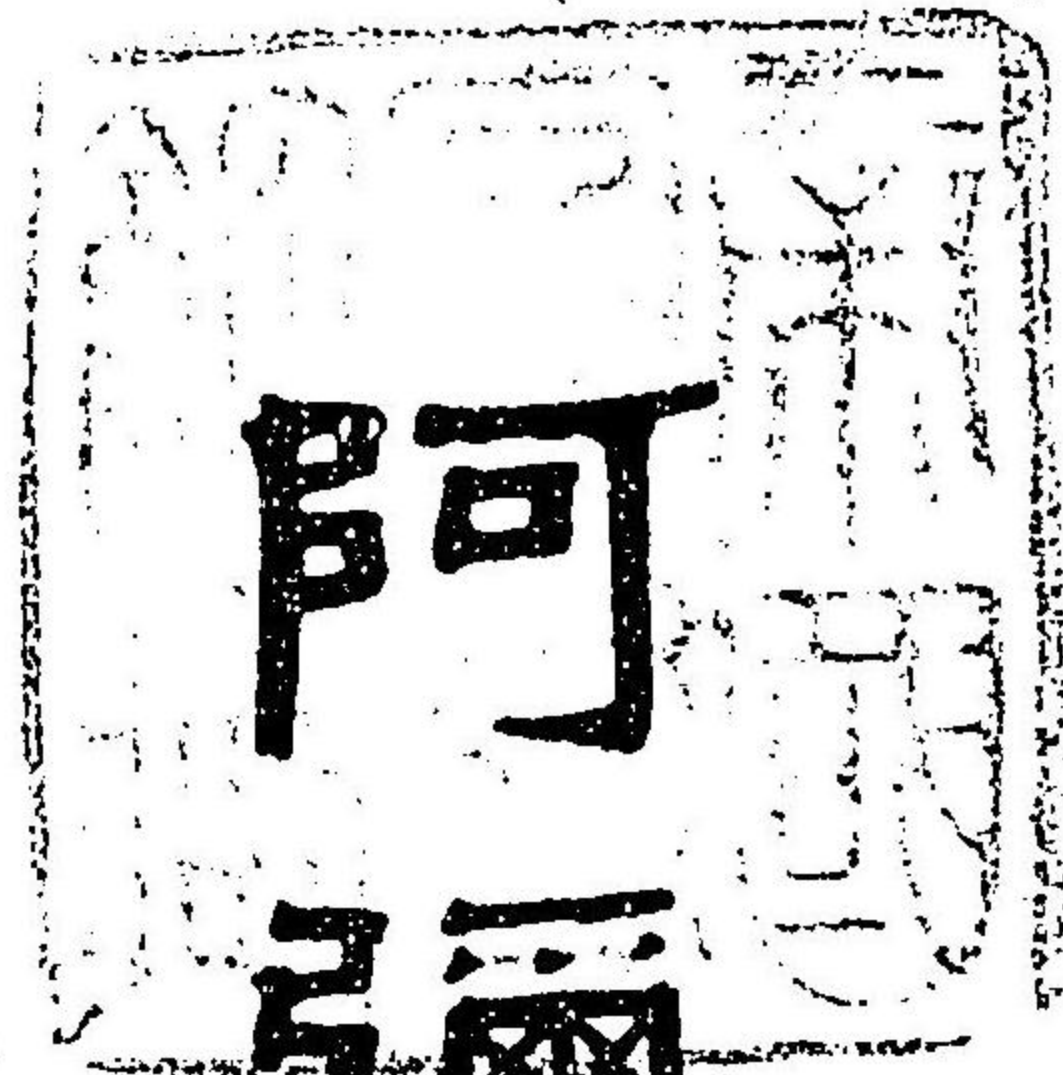


1900



阿彌陀佛

明治  
39 10 15  
内交

例言

一、この一小話は米國保羅馨蘭斯博士の近作「阿彌陀佛」と云つるを譯せるなり。

一、譯者は必ずしも原文の拘泥せず處に自家の意見を以て改竄したり。是は米國と日本と讀者の種類を異にするのみならず、本來の素養かおりて基督教國民と佛教國民と殊なる所あるに由る。

一、此書譯述の本旨は一は泰西の學者か如何に佛教を解するかを我國の讀者に示さんとするにあれど、主とする所は、其所説の日本青年の裨益になること多か  
ずんば思ひて也。



例言

一、多年在外の身、永く和文に習はず、生來の不文愈々甚し。讀者幸にこれを諒せよ。

明治三十九年八月

北米合衆國伊利能比州の片田舎にて

鈴木大拙

### 阿彌陀佛目次

第一章	得度	一
第二章	今道心	九
第三章	常一主宰の存在	一四
第四章	四大の歸處	二三
第五章	懺悔	三一
第六章	乾陀羅國	四三
第七章	迦 <sup>●</sup> 色迦王	四九
第八章	摩揭陀國	五七
第九章	馬鳴學者	六五
第十章	法身佛	七一

目次



二

第十一章	叛黨	八三
第十二章	虎狩	九四
第十三章	法身佛と天	一〇一
第十四章	象物語	一一一
第十五章	好耦一双	一二六

# 阿彌陀佛

ポール、ケーラス著

鈴木 大拙譯

## 第一章 得度

西暦紀元前第三世紀の頃、佛教の大外護者として四天竺に偉名を轟  
 したる阿育大王の世を去るや、印度は又々干戈の巷、亂闘の舞臺となり  
 ぬ。此時北方の雄族、月支、五河の上流に來りて諸弱國を併呑して乾陀羅  
 王國を建設し、其勢威四隣を壓したり、かく打ちつゞける騷亂のために  
 恒河々畔の諸地方は飢饉、流疫、荒廢の跡を留めて、悲惨の狀、人をして泣  
 かしむるものありたれど、各殿堂寺院における讀經、獻燈、禮拜は依然と  
 して舊の如く、王者は冠を失ひ、富者は産を破るをも、余處ふく風と看倣



二

し、日々の勤行、更に亂るゝことなかりき。喬木を斃すの大風も靡きて逆はぬ水邊の草をいかんともする能はず。

佛教僧侶の法を守ることを嚴肅にして、世波の浮き沈みに心を動かさず、思を内に潜め、徳を外に行ふの如何にも難有きより、北方の荒武者も自ら之に心をひかれて、無意識の裡に佛教の感化を受け、遂に轉迷開悟の教を奉ずるに至れり。即ち彼等は如來所説の四聖諦を信じ、第一、人生は苦なること、第二、苦は我執に基づくこと、第三、此我執は滅し得べきものなること、第四、即ち八正道により、此身を修め、此心を養へば、涅槃の聖果を得て、苦境を脱却し得べきことを信じたり。八正道とは正見、正思惟、正語、正業、正精進、正定、正念、正命是也。

乾陀羅王國の基礎の固まるに従ひ、百姓其堵に安んじ、商工業其舊態に復し、尙一層の繁昌を來たさん勢なるより、佛教の寺院も益々盛大に赴き、道を求むるもの、法をきかんとするもの、皆此に到りて、塵世の累を

わすれ、心の安慰を得んとしたり。

此頃の事なりき。北方豪族の一人なる拆羅迦と云へる一青年布路沙布羅市附近の一山寺に來りて、出家せんことを願ひ出でぬ。佛教々義の何たるかは此青年の未だ深く極めざりし處なれど、至誠真率の質なるより、自ら轉迷開悟の途を求めんと發心したる、その一念禁じ難く、親を離れ、家を捨て、出世立身の機會を放下し、胸底將に燃え上らんとする戀の念さへも抑えつけて、一圖に脱塵の望を達せんと志したるこそ殊勝なれ。

拆羅迦が入れる佛寺は、都の塵を離れたる溪流に臨み、自然の岩山を穿ちて成れるものなりき。溪流潺湲として清く、山僧朝な夕なに出て、飲料を此にとる。必ずしも人里遠しと云ふにあらざれば、村人の喜捨を受くるの便あり、田園も亦近かければ、時季折々の果物野菜にもことをかゝす。

三



寺内僧房幾何、相隣れるその中央部と思はしき處に佛龕あり、此あたり廣々として、衆僧朝夕の集り、或は説教、或は坐禪、或は其他様々の儀式を行ふ處にあてられたり。

佛塔の在る所も亦僧房の如く、天然の岩を鑿りて成れるもの、兩側に數本の石柱ありて並び立ち、中央を大廣間となし、左右を通道となす。

四邊の岩壁には佛陀一代の畫あり、本生譚の圖解あり、何れも僧中技巧なるもの、手に成れる、所謂素人の作なれども、信心の發揚する所自らなる趣ありて、觀者の心を助かず少しとせず。

今正に合誦禮佛のときや始まりけん、衆僧は二列を爲して兩側の通道を徐歩す。嚮導の僧は手に香籠を掲げつゝ、衆を率ゐて佛坐を繞る。衆僧嚴然として敬虔の情に充てるさま、釋牟無尼佛在世の時を忍ばしむ。佛壇の在る所一體は、如何なる工匠の巧みにや、一道の光明、上より來り、恰も朝日の雲を破りて射るが如くになし、參詣のものをして自ら渴仰

の念を起さしめたり。

衆僧の經文を合誦する聲嚴かに、朗々として四壁に響き、之をきくもの襟を正しうするを覺えず。さながら生佛自ら寂淨の涅槃より立ち出で、諸々の信心の弟子を教へ、導き、慰め給ふ如し。

禮讚の文をりくは、拆羅迦の耳底に止まり、心に浸むが如く覺えたるものあり。

山寺に浮世をさけて 吾等今寂靜觀法に

日をわたる心波騒がす 五欲又永く治まる

これをこれ涅槃の眞に 到るべき道とこそすれ。

衆僧經行して佛壇の正面に立てるとき、拆羅迦始めて壇上の聖像の說法滅度の姿なるに目を注ぎぬ。是時衆口一音に「吾等此身の終りまで清淨の生涯を營まんと欲す、吾等今佛法僧の三寶に歸依し奉る」と唱へ、又讀誦して、



吾心わだつみの如と、

甚深無礙ならむ。

慈と悲とに吾胸みたし、

山鳥のごと、

われかけん雲をしのぎて、

大空高く、

大聖なる世尊の教、

吾慕ひ仰ぐ、

吾を救ふ法の父なれば、

よばるゝまゝに、

われ行かん因果應報の、

道をたどりて、

讀誦了りたるとき、首座の役を勤めたる一人の長老前に進み、衆僧に

云ひけるは『爾等のうちもし事あり衆に告げんと思ふものあらば、宜しく出でて告報すべし』例規の如く首座の之を三たびするに及びて、須菩提と云へる長老衆を出で、云ふ。

『吾會下に一人の青年あり、吾教法を修行せんため、世を捨て、此に在ること稍々久し、今吾に従ひて衆中に在り、規に依りて入衆得度の式を受けんと願へり。』

『さらば其ものを此に呼び出せよ』との挨拶につれて、衆僧の前に進み出でたるは別人ならず、拆羅迦なりき。首座つくたくと彼を視、言葉を柔げて其名と其願心とを問ふ。

拆羅迦乃ち拜跪合掌して曰ふ、『吾名は拆羅迦なり、吾願は得度入衆に在り、尊者願はくは吾を僧團の一人となし、吾を導きて彼等と共に菩提に發心せしめよ、もろくの大徳、吾を憐みて吾願心を成せしめよ。』

首座長老成規に遊ひて諸問を發す、即ち『人間界のものなるか、男子な



るか、丁年に達したるか、自由不羈の身なるか、他人の隸屬ならざるか、負債なきか、惡疾なきか、誰が弟子なるか」等の如し。

是等の諸問滯りなく返答了るや、長老衆に告げて曰ふ、「諸大徳、願はくは吾言ふをきけ。須菩提尊者の弟子なる此もの、名を拆羅迦と云ふ。得度の式を受けんと願ふ。諸障更になし、乞鉢黃衣如法に所持して、須菩提尊者を師として入衆の許を受けんとす。此願望を容れんと思ふものは、黙して言ふを須ゐず。拒まんとするものは、起ちて所思を述べよ。」

長老此言を三たびして而して、衆中一人の起つものなきを見て、始めて宣告して言ふ、「吾は諸大徳の默容によりて、拆羅迦が須菩提尊者を師として得度入衆するを許すを認む。」

宣言の式を了へて後、僧團の四大禁戒を拆羅迦に授く。一つには殺生すべからず、二つには女色を視るべからず、三つは盜むべからず、四つには奇蹟を街ふべからず。次に三歸戒を授く。歸依佛、歸依法、歸依僧、是也。衆

皆之に和し、更に諷誦經行、禮拜、廻向を以て、式全く終りたるとき、また初の如く、二列を爲し、法堂の兩側に沿ふて退き、衆各其庵室に歸る。

## 第二章 今道心

拆羅迦は須菩提尊者の下にて多くの經文を讀誦し、研鑽しつゝ、穩かに日を送りぬ。尊者は吾弟子の能く忍び、能く聽き、能く専らに、能く務めて、而かも自ら驕らざるを見て、其將來の進境著しく、出藍の望あるを思ひ、心私かに大に喜びぬ。

拆羅迦の經を誦するや、其聲朗々として玉を鳴らすが如し。佛陀の聖教の其妙音に和して暗誦せらるゝときは、聽くものをして其心自ら寛かなるを覚えしめぬ。

かくて外面より見たるだけにては、拆羅迦の境涯は専ら經文を習ふに在りて、餘念なきが如くなりければ、衆僧も此青年僧の行末を思ひて



喜びたりしが、もし須菩提尊者にして其新弟子の心の奥を看透すべくば、平和満足の相貌に似合はず、其胸底には、何となく物足らぬと思ふ心持ち、あかく心もち、逼る心もちなどの、さまよへるを認めたるなるべし。何となれば出家の生涯は彼の理想を實現したるものにあらざりければ也。

拆羅迦は尊者の下に在りて種々の法語を暗誦し、其美はしき情操、其妙なる格調を喜びぬ。其の深く人生の秘機に徹せるもの、道念の粹を發揮せるものに至りては、彼は珍重して措かざりき。

精進は不死の途なり、

懈怠は死の途なり、

精進のものは死せず、

懈怠のものは死に等し。

の如き又

無瞋を以て瞋にかち、

善を以て不善にかち、

不惜を以て吝にかち、

眞實を以て詐僞にかつ、

の如きは、拆羅迦の何れも讚歎して、其旨の深きを味へるものとす。

されど拆羅迦時には其意に稱はずと思ふものあり、何となれば彼の求むる所は心の平和を得るに在りて寂滅にあらず、涅槃の法樂と發揚とに在りて枯木寒巖に倚るの消息にあらざればなり、されば活動の圓滿なる充實を斥けて、ひたすら静寂無爲の境に入らんする如きは、如何にしても彼の肯ひ難く思へる所なり。

汝もし自ら緘黙せば 破鐘の如くに似て

涅槃此に得らる また苦惱なし。

と云ふ如きを聞くときは人生其ものを否む如くに思はる。されど宗教



二

の眞髓は意義なき闇熱をして其歸趣を明かにし、惡念、私慾を亡ぼして、生々の理を明かにし、徒らに蔓こり繁らんとする雜草を除きて、禾穀の成熟を期するにこそあらめと拆羅迦は信じぬ。何となれば、佛陀云はずや、

凡そ事のなすべきものは

力をつくして之を營め、

志たゆまん道人は

塵をのみ揚ぐることも多し。

『無明と煩惱とをこそ滅ぼさめ、眞如赤裸々の意は存せざるべからず。生きて動くが罪にあらず、惡にあらず、貪と瞋と痴と、これを三毒となす。癡識其ものは可もなく不可もなく、意識の之を觀じて我となし、之を執するによりて無明増長し、染汗を生ず。吾は淨白の境に歸りて、本來の面目を活躍せんとのみ思ふ、徒らに寂靜に耽りて何の益かあらん』など拆

羅迦は思ひつゝいけぬ。

かくて拆羅迦の胸には無限の大望涌きぬ。須菩提心に思ふやう、『彼が前途に横はる一大障礙は驕慢なり、天然雋英の才、衆に挺んするより、識らずく自ら恃むの念を生じなば、これを除かんこと容易のわざにあらず。世欲に溺れ財利に耽るものは愈し易し、自ら喜び自ら驕るの病は骨髓に達す、頗る治し難し』と、乃ち拆羅迦のために此偈を誦す。

虚空會て道あることなし、

沙門いかで外觀に矜るべき、

衆生は只世間を楽しむ、

如來は即ち出世間なり。

拆羅迦は如何にしても虚無恬憺の仙人主義は宗教の極意と考ふることに能はず、『もし佛教にしてこの隱遁主義を説くの外、天地任運に活動するの理趣を明めずば、吾は到底出家を仕遂ぐるの器量にあらず、釋尊

三一



の教は吾がために高遠に過ぐると云ふべきか。鐘あり鳴りて而して節に合すればこそ、其の鐘たるを全うするなれ、破れては何かせん。此心動きて而して道を離れざればこそ、人たるの用を遂ぐると云ふべけれ、心を死灰にしては瓦石と何の擇ぶ所ぞ。此くして得たる羅漢の果は、枯野の骸骨に似たりとやせん。佛教はかくの如きものにはあらざらん。活潑々地の源泉、是吾求むる所にぞある。』

### 第三章 常一主宰の存在

佛教の印度に擴がれるさまは、水の地を濕す如く、知らず識らずのうち、人民の信仰となれるより、在來の諸宗教と矛盾する所少なく、従ひて佛教の特質とは如何なるものかと疑はるゝほどなりき。

拆羅迦を成人せしめたる宗教的空氣とも云ふべきものは、其頃印度に播れる諸種の信仰、傳説、學説、思想の混合せるものなりき。北方種族の

間に古より傳はれる神話も、其大半は現代青年の腦裡を辭して、さしたる印象を止めず、印度在來の口碑傳説に至りては、尙其勢力の新しきが上、因陀羅、涇婆、毗首拏の名は、征服せらるる民族の守護神として、さまざまの尊敬をひかず、併し教育ある人士のうちには、哲學思想の頗る發達せるをもて、婆羅門天を常一主宰の存在となし、至大至剛にして一切處に遍滿し、其性缺くる所なく、其智不増不減、宇宙を創造し、作成し、統御し、萬有の父となると信じたり。拆羅迦も幼時より這般の思想に觸着せざるにあらざりければ、嘗て心を此に潜めたりしも、此僧院の人となりて以來は、少も此等の事を耳にせざりき。拆羅迦は之を不思議に思ひなしぬ。佛教にては其教祖釋迦牟尼をもて人天の大師となし、恭敬禮拜の主體となせども、他の宗教が梵天をたのみ如くならず、されど佛教は敢て他の宗徒を斥けんとせず、又之を迎へんともせず、神を拜し、天をあがむるものは、其信する所にまかせて、敢て干渉せざるを旨となしき。



拆羅迦は尙周圍の事情と相親まざりし時こそ緘黙して、思ふ所を包みたりけれ、今や次第に須菩提長老の情に厚きを見、伍輩の心の在る所をも知りければ、ある日法堂の椽側に打集へるを好機となし、拆羅迦は常一主宰の存在に關する難問をもち來りて、當座の公案となしぬ。

佛教の修行道場における生活は極めて沈着に極めて眞面目なりしより、平生談笑の時すらも、聲を勵まして物言ふことなどは絶えてなく、従ひて滑稽を弄するものもなかりき、されど多衆の中には、大抵一二の心軽く、諧謔の性に傾けるものあるは、到る處然り、此處の修行道場も其例にもれず、物の可笑しき處を見るの眼鏡く、直ちに之を指摘して自ら笑ひ他を笑はすものなきにあらず、固より聲を揚げて哄笑し自らわするゝなどは道を求むるものゝ敢てせざる所なれど、互に目くばせして莞爾たるは、屢なりき、されば此等の山寺の四壁を飾れる諸阿羅漢の一代記中、今尙残れるものゝ中にも此跡を認め得るは偶然のことならず

と云ふべし。

そはともあれ、今や拆羅迦の天地主宰に關する問題を提出せるとき、衆中に計婆陀と云へるものあり、丈余り高からざりしも、四肢の發達充分に健康の色面に現はれて、輝やくばかりなるが、拆羅迦のほとり近く寄り來りて言ふやう、『君が言ふ天地の主宰とは、因陀羅なるか、雷電を使ふ天か、蘇摩に酔ふて大言壯語する第二天の司宰か、俗の帝釋又は婆薩婆と云ふもの是か、もし然らずとせば、かの頭蓋骨の首飾をつけたる獐猛比類なしと云ふ大威天溼婆を指するか、思ふに君は、魚となり、野猪となり、白馬となる權化自在の毘溼拏天を意味するなからんか。』

拆羅迦首を左右に打ふりて之を否みければ、計婆陀更に歩を進めて曰ふ『さらば君が天主なるものは彼の愛の神と崇めらるゝ、吉利須那天を言ふにはあらざるか、身を羊にやつして一切の羊飼の女ど一時に躍り狂ひたるも、羊飼女自らは、己れ獨り、その愛羊に乗りうつれる吉利須



那天の手を取れりと思ひたるとぞ。此天こそ君が所謂る主宰の神なるべけれ。』

拆羅迦曰ふ『わが知らんと思ふは是等の諸天部にあらず、第一主宰の天なり』と、其言に力をこめて、彼が問答の眞面目なるを示し、諧謔の材料とならざらんを示しぬ。

計婆陀乃ち譏笑の唇頭を動かして曰ふ『ア、然るか』と、而して彼が眼中には一種の者あり、拆羅迦の吾思ふつばに陥れるを喜ぶに似たり。何となれば計婆陀嘗て婆羅門の僧と此事を談論するとき、彼が論理の破れ易き處に直入して一刀に論敵を屈服したることあるを思ひ、今又此論鋒を拆羅迦に加へんと用意したればなり。乃ち曰ふ『ア、然るか、君は諸天部個々の神を究めんとせず、神の全體を總じて知らんと曰ふか、嘗て人あり、僕に命じて市に行きて果實を買はしむ、僕やがて香蕉、芒果、椰子、葡萄など諸種の菓物を買ひて歸りたれば、主人叱責して云ふ、香蕉、芒

菓、椰子、沙梨、石榴、桃李の類はわが所望にあらず、われは果實を願ふ、果實と云ふ一切を總括したるものを願ふ、個々の果實はわれ望まずと、拆羅迦子、君の所望も亦是に似たることなきか。』

拆羅迦曰ふ『君は談論の雄者なり、その詭辯吾當らず、されど君は一神と多神との差を知らざるに似たり、吾が好むは一神にして、吾が憎むは多神なり。』

計婆陀又多少嘲笑の氣味をもて曰ひけるは『かゝること果して出來得べきか、君は個人を憎みて人間全體を愛すと云ふ、商人を憎み、婆羅門を憎み、刹帝利を憎み、須陀羅を憎み、而して人間と云ふ全部を總括したる抽象體を愛すと云ふ、かゝることは果して吾等のよくし得る所か、君は一神を愛して多神を憎む、全體は個々を概括せるものにあらざるか。』

此の激げしき論鋒に打たれて、拆羅迦は多少ひるみたるが、更に自己



の所信を主張して曰ふ、『われは師兄のわが意を領せんを願ふ、われ等が生息の世界は秩序の世界にあらずや、因あり、果ありて業報の理、嚴然たり。此理の源泉なかるべからず、吾常一主宰の存在とは此源泉を云ふ、法界の主なり、萬象の歸處なり、衆生の父なり、百善の本なり、無生無滅不増不減の體なり、而して吾等萬行の規なり。』

計婆陀は口こそわるけれ心に惡意なく、拆羅迦の眞面目なるを見之を慰めて曰ふ、『わが諧謔は君を怒らせんとにあらず、滑稽の裡に親しく眞理を味はんと思へるのみ。言に顯はれたる上にこそ戯れの意あれ、眞理はきはめて眞率なり。君の言ふ所の如くは、君は婆羅門教徒の所謂梵天を冀ふものに似たり、されど君嘗て思の此に到れることあるか、もし常一主宰の梵天なるものありて、しかも、名色界の存在なること、猶ほ他の諸天の如くならば、そはわれ等の意識の偏計所執に外ならず、又もし梵天にして君と我との如き個的實在なりとせば、吾等彼をもちゐて何

にかせむ、究竟濟度の道は各自の精進より來る。梵天の智慧は吾が智慧にあらず、而して天上界の梵、人間の吾等に何の教ふる所あるべき。』

拆羅迦は此辨證を肯ふ能はず、計婆陀の所説を尙足らずとなして曰ふ、『只此法界に常一の主宰ありと言ふだけにて、吾心に休息あり、得力あるを覺ゆ。此ものは人間不到の處にあらんも知れず、又虚空の充たぬ所なきが如くならんも知れず、又全くわが想像の外に逸出せる不可思議不可量のものならんも圖られず。そはともあれ、常一のものありて吾法界における一切の善、知、眞、美の根源とならざるべからず。このものなからんには、われ如何に眞理を求めんとするも、何處に眞理の定規を得べきか。』

計婆陀曰ふ、『然り空想を追ふもの、これをもて一箇の實在の如く思ひなし、宇宙の主宰、萬物の根源となすこと、惡しからずとせず、猶ほ小兒の玩具を要し、初學未熟の徒が諸天を信する如し、われ猶若かりし頃、亦一



種の空想に耽りたること君の如かりき、其頃の一小話をわれは今に記憶す。』

此の時『其小話、吾等のために演説し玉へ』と云ふ尙うら若き一僧あり。計婆陀『否、わが拆兄の感情を害ふことなくば、此一條の物語をなさんも亦一座の興なるべし。之を梵天信者の前に語らんはいかゞはし。』

拆羅迦曰ふ、『吾は梵天の信者にあらず、吾信する所の天は一切の根源にして萬物究竟の理なり、常一主宰の實在、一切知者、一切世界の造物主、作成者、勝者、征服者、支配者、而して一切衆生の父となるもの、未だ曾て生れず、未だ曾て死せず、もし師兄の物語にして自他を利せば、たとひ吾信仰を批難するものならんも、吾も亦之をきかんと思ふ。』

是において、計婆陀容を改めて物語に入らんとす、衆皆黙して耳を聳つ。

## 第四章 四大の歸處

嘗て波羅奈斯バガナシに婆羅門族の一僧あり、吠陀に精通す、尋常一様の僧にあらず、誠實求道の士なりき。安心立命を得んとて、涅槃の彼岸に達するを願ひたるも、此色身のまゝにて如何に寂靜無爲の境に入り得べきかを解し得ず、動きて止まざるは天地の理なり、四大和合して此に色身あり、而かも此四大一々の性中に寂靜の法あることなし、是におゐて彼以爲らく、安心立命の上に進境を得んには、まづ地水火風の四大が空寂に歸する處を知らざるべからずと。

婆羅門僧は此く決心して深く三昧に入り、諸禪天に上り、まづ四天王の處に到る。到り了りて四天王に問ふ、『地水火風の四大畢竟何の處に寂滅するか』此問を得たる四天王は答ふ、『吾儕は四大の畢竟して何の處に寂滅するかを知らず、君もし更に一層の天界に上らば吾等に優りて光



明あり、智慧ある禪天を見るべし。其處に到りて或は四大畢竟寂滅の旨を解するものあらん。』

僧乃ち更に一層天に上り、自在天の處に到る。乃ち亦さきの問とるを發したるに此の天亦答ふること能はず。『夜摩<sup>ヤマ</sup>天の處に往け、深遠、玄奥の法義を究め、死者の靈魂を統御するは此天なり。思ふに汝の問は其處にて説明せらるべし』と曰ひぬ。

自在天の教ふる所に從ひて、更に上りて夜摩天に到り、同じ問を發して同じ答を得。此に於て又上りて歡喜天に之く。『此に接める天人は其名の如く、其處に安じて、希求の念なく、靜寂にし常に適悅の心あり。もし君が問に答へ得るものありとせば、此等の天衆なるべし』とは、夜摩天の示す所なりき。

僧又上りて歡喜天に到り、更に同じ問を發したるが、例に依りて失望せざるを得ざりき。天人曰く。『僧よ、われ等は四大の畢竟して何の處に滅

却し去るかを知らず。尙梵天の衆あり、一層の光潔を放ち、一層の智徳を備ふ。君もし往て彼處に到らば、君が法問の解決を得べからんか。』

僧、教に遵ひて、又禪定に入り、梵天に上り、梵天衆の處に到る。到り了りて、天衆に向ひ、また如上の問を發す。天衆曰ふ。『吾等不幸にして君が問に答ふる能はず。されど梵天大王あり、かれは一切の根源なり、最上の主宰なり、一切智者なり、完全にして無缺也、一切のもの皆其規約の下にあり、彼は一切の創造者、作成者、勝者、天父、君主、頭領なり、光明、智徳の盛なるは諸天の企及する所にあらず。君もし彼處に到らば、必ず四大が究竟して寂滅に歸する處を示さるべし。』

婆羅門僧の『さらば其梵天王の居處は今何れに在るか、と問へるに、天人等答へて曰ふ。『吾等大梵天王の今何處に在るか、何れの方面に向て索むべきかを知らず。されど梵天王は一切處に遍滿し玉ふが故に君は其微候を認め得べからん。一道の閃光の動く處は即ち梵天王の來處なり。』



梵天王の來ますときは、必ずまづ一道の光明あり、一條の閃光あり。』  
 婆羅門僧乃ち、佛陀の教義に遵ひ、如法に祈禱をこらして、梵天王の出  
 現を希ひければ、天王しばらくにして現はれ給ふ。僧進みよりて申しけ  
 るは、『大王、冀はくは吾がために四大の究竟して空寂に歸する處を示し  
 給はれ。』

僧此問を發し了れるとき、大王徐ろに口を開きて、『吾は梵なり、大梵な  
 り、最上の存在なり、一切成なり、一切見なり、支配者なり、一切の主なり、創  
 造者なり、作成者なり、首長なり、勝者なり、操權者なり、一切の父なり。』

僧再び此問をなすとき、大梵また之に應じて曰く、『われは梵なり、大梵  
 なり、頭等の存在なり、一切成なり、乃至一切の父なり。』おのれが名號を列  
 ね擧ぐることに最初の如し。

僧は謹んで梵天王の再び其名號を唱ふるをき、けるが、又押し返し  
 て三たび云ひけるは、『吾が聞かんと欲するところは大王の尊號にあら

ずして、四大究竟の空滅の處をきかんと思ふなり。』

梵王尙依然として曰く、『われは梵なり、大梵なり、頭等の存在なり、一切  
 成なり、一切見なり、乃至一切の父なり。』と。

僧今や堪へ兼ねたりけん、席を起ちて曰ふ、『大王は意識を有し給ふな  
 らんに、何とて器械の如く、おのが尊號をのみくり返し給ふぞ。』

大王また坐を起ちて、婆羅門僧の側に來り、他の耳目の及ばざる處に、  
 僧を導き、耳語して曰ふ、『諸天の衆と下界の衆生と、皆われを崇めて一切  
 の智者となし、禮拜し、供養し、到らざることなし、わが連りに尊號を繰り  
 返すは他の耳目を憚ればなり。其實を言はんには、われ誠に四大空に歸す  
 るの處を知らず。汝が人界を離れて天上に來りたるは、誤れり、今人間界  
 に釋迦牟尼と云へる大覺佛あり、汝もし往きて此智者を訪ひ、彼問を發  
 しなば、必ず答を得ん。汝唯々として其答ふる所を信じて可なり。』

婆羅門僧之をきくや、一彈指の間に天上界を去りて、人界に下り、忽然



として大覺者の前に現る。合掌禮拜して恭しく問ひけるは『尊者、願はくは吾が爲めに四大の畢竟空滅の處を示し給はれ。』

佛陀此問をきゝ了りて、さて曰ふ、『嘗て海商あり、一羽の鳥を養ふ、もし船の大洋に在るとき、陸を離るゝこといくばくなるかを知らんに、試に此鳥を放つ、去つて歸らざれば、其陸の遠からざるを察す、之に反して、此鳥もし東西南北をかけまわりて、而かも尙一角の陸地を見ずば、もとの處に還り來ると云ふ、汝婆羅門の僧も亦此鳥に似たるかな、汝が疑ひを解決せんとて、諸禪天をへめぐり、梵天にまで到りながら、尙其歸處を決し得ず、却りて人界に下り、吾所決を求めんと思ふ、汝は問の初歩において過てり、四大何の處に滅却するかと問はずして、下の如く問はんを要す、

『水大と、風大と、火大と、地大と、

何れの處に其繁縛をとくか、

彼我、善惡、長短、麁、細、

此分別何れの地に沒却するか、

名と色と無差別界に入りて、

本來空に歸するは何れの處ぞ、』

乃ち答へて曰く、

『心光赫奕の處、

永遠にして窮なし、

廣大にして限なし、

此處これ、地、水と、火、風と、

乃至一切の大を離れて、

無罣礙無繫縛の處、

何をか我とせむ、彼とせむ、

善惡、長短、乃至麁、細、



一切の名色泯滅して、

此に本來空を現す。』

是に於いて婆羅門僧百疑一時に決す、四大の世界は本より動きて止むことなし、止めんとするも得べからず、過彼にあらすして、我にありも、我心だに寂靜にして動かすば、外物吾を如何ともする能はず、自救不可ならんには、諸禪天の智恵と功力とを以てして吾を救ひ得べし、梵天、大梵天、頭等の存在、主なる者、造るものありとも、亦何をかなさむ、生贄を捧げ、祈禱をこらし、禮拜をつとめんも、自修を缺き、行道を怠り、知恵を得ずして、何の日に到彼岸せんや、涅槃の境界に入りて、至上の歡喜を得んとならば、人天の師なる、わが大覺世尊の教旨を仰ぎ、八正道を守りて、自ら力め、自ら修め、まづ自家の胸裡より將ち出で、而して蓋天蓋地ならんを要す。

## 第五章 懺悔

爾來拆離迦は日々を讀書誦經に送り、夜々を苦心煩悶に過しぬ、師なる須長老の前に在りて大聖世尊の金訓を誦し、本行經などにある、世尊前世の因縁と、其中に含める深遠なる道德の意義を聞くときは、自ら膝の進むをわするゝほどなるも、さて夜に入りて自房に歸れるとき、又は林中、中庭の外など、獨り經行せるときは、何となく心落つかず、かく世を離れて、人事にのみ遠ざかる出家沙門の一生のいたづらことにあらざるかを疑ふにつれ、世波の浮沈常ならず、或は笑ひ、或は悲み、或は勝ち、或は負けて、一起一伏するが、却て興あり、趣あるやに覺えられぬ、山下、樹の陰、世の塵を避けて、思を遠く宇宙の外に馳すること面白からざるにあらねど、日々夜々の勤行單調に失す、世の騒ぎ却て心の安きを來さんかと思ひぬ。



拆羅迦此山寺に來りてより日々の精勤によりて多くの經文を暗んじ誦し、今や其智識儕輩を抜くにつけ、他の尊敬を受くること益々多きを加へたるが、それにつけ自ら心に何の得る所なきを愧ぢ、日々の勤めをさへ却て懶きことに思ひなしぬ。彼は此に至りて未だ出家の眞義を解する能はず、又其身の遂に此に朽ち得べきかを疑ひぬ。

懺悔の日はまた來りぬ。拆羅迦例によりて潔齋し、冥想に時を送りたるが、心の惱み已まず、依然として物の悲しさを覺えたり。

夜に入りて、時刻の迫まれるまゝ、拆羅迦衆と共に法堂に出づ。室内何となく薄暗く、柱梁及び四壁の彫刻、繪畫など總て模糊の中に葬られぬ。炬火の明滅する毎に、堂裡の明暗時ならざりしも、拆羅迦には何となく總ての者一種陰鬱の氣に包まるゝ如く見えたり。されど各僧房より集へる衆僧は、何れも閑寂、恬愴として、浮世の風の何の邊に吹くかを關せず、生と死と命のまゝ、涅槃に至りて乃ち休すとの心、其面に現はれぬ。

首座の長老坐より起ちて曰ふ、『諸大徳、吾が言ふ所をきけ、今霄は正に明月に當れり、吾曹が胸中の紛紜を解くべき時なり。各位もし準備整ひなば、例によりて懺悔の式を行はむ。是れわれらが最要の勤行なり、清淨潔白の身を保つ、これを出家の梵行となす。』

衆僧一齊に答へて曰ふ、『吾等如法に此に在り、聞くべきを聞き、判すべきを判せむ。』

長老更に進んで曰ふ、『汝等のうち若し違法の所行あらんものは、出でゝ懺悔せよ、心に罪業の覺へなきものは、唯黙して止め。』

爾る時丈高き一僧あり、徐ろに堂の一隅より出で來る。稍躊躇の色あり、兀然として柱に倚りて立つ。未だ物言はず、さながら罪その者の影に似たり。長老遂に寂寥を破りて曰ふ、『違法の所行をなし、心に之を覺ゆるもの、若しきよまらんと思はゞ、懺悔せよ。懺悔は心の惱みを軽くすべし。』幻影の如き姿は尙立てるまゝに動かす、場内の光景一層の暗愴を加



ふるを覺ゆ。

長老更に言をついでて曰ふ『彼處に一人の僧ありて立てり、何事か言はんと思ふものならん。既に如法に問を發して後、自分の過を懺悔するに躊躇するものは、故意に戒を犯すとなす。而して故意の犯戒者は淨行の罪人なること、佛敕嚴然たり。』

爾時、幻影の如き姿始めて頭を擡ぐ、胸中限りなきの情を漸くに收め得て、重く口を開き、『長老尊者及び諸大徳、われは思ふ所を述べて心の惱みを息めんとす、願はくは之を容れられよ』と曰ふ。かく語り出でたるは別人ならず、拆羅迦なりき。一座稍、動く。『思ふまゝに其所懐を述ぶべし』との許を得て、拆羅迦進んで曰ふ。

『長老尊者及諸大徳、われは重禁戒の一を犯したりと思ふ。われは芭蕉の樹の今や萌え出でんとする芽先を切られたるに似たり。吾胸なやみ、吾心悔ゆ。われは釋迦牟尼世尊の弟子とならんと思ひたれど、今にして

其難きを悟る。われは到底高徳の出家となるべき資格を有せず。』語りて此に至れるとき、拆羅迦の聲は覺えず震ふ。眼には、涙ありき。

此懺悔の發端をきける一坐の衆僧は、一種の電波に打たれたる如くなりき。一には此僧の年尙若く風采頗るあがれるが上に、才智も乘に超えたるが、却て其身の仇となり、思はず他の誘惑に陥りたるかを疑ひ、一には己等が此僧の何かにつけ優れたる所あるを褒めあげ、いつくしみたるより、自ら此望みある青年の前途を誤まりたるかと思ひ、彼が懺悔して其身を責むるをきゝては、衆僧いづれも自ら顧みて慚愧の念なきはなかりき。

長老とくに一坐の動かんとせるを抑へ、拆羅迦の尙進んで懺悔せんを奨めんとて曰ふ『徒らに自ら恨ることなかれ。汝が齡未だ高からず、昔時相戀の夢尙覺め難くて、時に煩惱の種となること、あながち尤むべきにあらず。』



拆羅迦答へて曰ふ『わが此道場に入れる本來の願は、智慧を進め、神通力を得んとなり。われに大望あり、われは爲す所あらんと望む。わが選佛の道場に身を委ぬるは所得の知識を擴めて、世に事をなさんと思へばなり。而して此望は今や空しくなれり。此願はととも稱はぬに似たり。われに破戒の現行なし。されどわが清淨は僞なり。わが敬虔は其實なし。われは僞善者なり。長老尊者及び諸大徳を欺けるものなり。而してわが最も悲しむは自ら欺けるに在り。われは出家の衣を着るべき資格なし。』

長老曰ふ『われ人誰れか完かるべき。汝は聖に到るべき途上に在り。勤めなば其域に達せんこと難からざるべし。汝が過は僞善にありと云はんより寧ろ心にあかくに在り。』

拆羅迦『長老、強ひて吾過を救ひ玉はされ。われは吾が心、吾胸に何となく落付かぬ處あり。われもし僞善を衒ふものならずば、吾は異端の外道なり。外道は佛の正道にあらず。何の日に佛域に到るを望むべきか。わが

過の在る處はわれ自ら知れり。之を救ひ、之をなだめんこと然るべからず。われは此迷闇を出で、光明に入らんと思ふ。われは此生を愛す。此生の發展を願ふ。われは深遠の玄理を窮め、最高の歡喜を得んと思ふ。而してわれは亦大事業をなさんと望む。』

長者問ふ『さらば汝は尙塵世の虚榮を希はるゝか。汝は尙其力と、其利と、其名と、其快とを忘るゝ能はざるか。我執の念尙動きて止まずと見ゆ。汝は眞理そのものを求めずして、自ら眞理の所有者となるを矜らんとするにはあらざるか。さらば是れ自ら高うする者にして、謙讓人に仕ふるにあらず。虚誇自ら喜ぶ者にして、己れをわすれ人を救ふにあらず。』

拆羅迦『長老尊者、或は然あらんも知れず。尊者の智は能く予が胸底を看破し得べし。されどわれには毫も我欲の念なしと信ず。われは左程に自分を愛せず。眞理のため、正義のため、他を救はんため、其他一切世を益し、人を益するためには、此身を犠牲にするを厭はず。又敢て世の虚榮を



逐ふとはあらざれど、故らに之を避けんとの要あらんや、苦と樂とは人生を織りなせる經緯なり、而してわれは必ずしも生を惡まず、われは此生の發展して理想の實現せられんを願ふ。これ吾がためのみにあらず、亦利他を兼ぬ。わが愛する所は神なり、身自らにはあらず、これをわが過となす、わが誤り、わが外道、わが偽善、わが矛盾せる現在の位地、皆此愛神の―源より來る。』

此の如き懺悔に對しては、情深き長老も言ふ所を知らず、只管に苦悶せる若年の今道心者を憐むのみ。拆羅迦が一種不可説の苦みに惱めるをば衆みな悟り得たれども、如何にして之を愈やし得べきかは、知るものなかりき、彼の願望なるものは確かに高尚なり、必ずしも破戒違法と云ふべからず、彼が神を愛すと云ふも罪過とは言ひ難し。

首座なる長者遂に拆羅迦の先進にして師なる須菩提尊者に向ひて問ふ、『法兄尊者、師は拆羅迦の平 を知り賜へり、嘗て彼が異様なる行爲

を氣付き給ひたるか。』

須菩提は嘗て其事なきを告げぬ。

首座長老更に拆羅迦が得度以前に於ける信念及び愛神の意義を問ひければ、須菩提尊者答ふ、『尊者、吾知らず、されど彼は婆羅門徒にはあらず、乾陀羅王國を建設せる北方雄族の末流に屬せるよしも聞く。彼が學識の博きは當に諸々の婆羅門經典を知れるのみならず、極西文明國の耶和那哲學にも通達せり、閑居のをり、其談論をきけるに、彼が謂ふ所の神なるものは、宇宙に於ける善、眞、美の本源にして、菩提の由りて來る處なるに似たり。』

首座長老の尊者云ふ、『果して然らんには愛神必ずしも罪過ならんや、拆羅迦の所謂る神なる者は吾等の教主大聖釋迦牟尼如來に外ならず。』又半ば教誨の意をもて、『佛陀には天以上神以上の名號を奉るこそ至當なるべけれ、たとひ諸天神實に存在とするも佛以上には出づべくも



あらず。何んとなれば、佛陀は人天の大導師にましまし、三界の教父にてをばせばなり。天の高きも神の尊きも佛の聖徳には及ぶべからず。』

是において長老尊者、改めて諸大衆に告げて云ふ、『拆羅迦懺悔の始末此の如し、われは大衆が此に對して如何なる處置をとらんとするかを問ふ。彼は果して吾等の戒法に違背したるものとすべきか、誠に然りとせんには吾等は如何に彼を處分すべきか。』

爾時須菩提坐より起ちて曰く、『拆羅迦は深慮あり、誠心あるものなり。彼が經驗せる所の障礙を除くが如き、又彼の位地を批判する如きは、吾等の力の能くする所にあらず。今摩竭陀國に馬鳴尊者と云へる大徳あり、もし今の世に拆羅迦のために光明を興へ得べき人ありとせば、此馬鳴尊者を除きて他に居るべくも覺えず。佛滅後、智慧の深き、道德の高き、此尊者と肩を比ぶべきもの。今代に誰れかあらむ。われ是より推薦の狀を認めて、拆羅迦を馬鳴尊者の許に送らむ。尊者必ず能く彼が疑團を釋

きて再び正道に歸らしめ、吾が佛教に入らしむべし。』

首座長老は須菩提の意見に同意を表し、一座の大衆も亦之を賛す。かくて拆羅迦を摩竭陀國なる馬鳴尊者の下に送り、大慈大悲の佛徳によりて菩提の光明に接得せられ、彼が佛智を圓滿せしむることに議は一決したり。

恰も好し、此時乾陀羅の朝廷より急使來り、拆羅迦と云へる醫術に長け兼ねて其外の諸學に通せるもの。此衆中に在るかと思ふ、國中今や恐ろしさ疫病蔓延し、之がため老王既に物故し、其二子は病瘵に呻吟す。命通りて旦夕を計られず。第一の皇子は西北の國境に出で、安息國の軍兵と正に鋒を交ふ。逆逆はこゝに止まらず、東方摩竭陀の境に兼てより不服の民族あり、名は摩竭陀王に屬すれども、其實は殆んど獨立の政府を有す。乾陀羅國に對して兼ねての不平あり、此機に乗じて之を散さんとして、國境を超へて侵襲し來る。誠に是れ乾陀羅國多時の秋。



拆羅迦に對する大衆が敬重の念は、かれがなせる懺悔によりて寸毫も減退せざりしのみならず、却て増進したるものあり、彼が名族の流を汲めるものなることは、人皆之を知り居たれども、拆羅迦は嘗て此事に介意せざるものゝ如くなりき。然るに今又此の使者の言によりて、彼は頗る乾陀羅の王廷に親近せること分明と覺り、大衆の心に一方ならぬ畏敬の念を生じぬ。拆羅迦の此くまで王廷の信用を享くるものなることは、誰も來だ知らざりし所なればなり。

この不意の阻滯ありしに關せず、懺悔の式は法の如くに進行し、局を結ぶ戒を犯し、規に背きたるものは、其自白によりて、處罰せらるゝこと例の如し、終りに臨み、首座の長老、拆羅迦に告げて曰ふ、「汝もし其胸中の煩悶を秘して語らざりせば、僞善の過ありしならん、今や何事も明白となりぬ、汝亦心にやましき所なし、自ら欺けることなし、吾等亦汝の位地を非難すべき材料を有せず、汝もし遂に出家なり難しと思はば、此處を

去るを妨げず、汝の意に逆ひて、吾等と共に在らざるべからざる法規なきは、汝の疾に知る所なるべし。」

長老乃ち拆羅迦の王命に遵ひて乾陀羅に行くを許し、且つ曰ふ、「汝もし永く此處を去らんと思はば、然かするを憚るなかれ、吾等は汝の前途に、平和と幸福とあらんを願ふ、只望むらくは決定して汝の疑團を解け、國事稍々緒に就かば、必ず摩竭陀國に行きて馬鳴尊者を見よ、尊者は吾教近代の大耆宿なり、必ず汝のために疑を決して、教祖釋迦牟尼の本意を明かにせむ。」

## 第六章 乾陀羅國

夜既に更けたるより、王使暫く乘馬を憩はし、朝まだき拆羅迦と打連れて出で立つ。今や雨期に入らんとして、朝霧濛々、深く前途を塞げるよ、みちゆき思ふまゝに進まず、漸くにして乾陀羅の國境なる山中を過



ぐる時野武士の襲來に備へ居れる王軍の哨兵の誰何に逢ふ。王使乃ち路券を示して哨兵線を過ぎ、日既に暮れて、星二三つ出づる頃、宮城に入る。城門も亦固く守らず、番兵二騎を案内して、之を當直の將校に導く。此將校、拆羅迦の無事に着城せるを喜びたるか、其報する所によれば王子の四人は果敢なく病に斃され、残れるは旃檀那王子のみ。此王子は三人中の季子にして世に迦膩色迦王と云ふ。而して此王の命も亦旦夕に迫まれりと傳ふ。

此夜時に暗きが如く覺えられ、王城のほとり暗憺として一種の陰氣に包まる。行きちがふ人々、幻影の動くが如く此世のものと見えず、さきの世になせる罪業に驅られて魂魄尙中有に迷ひ、時に下界を彷徨するに、さも似たり。

拆羅迦王宮に到るや、直ちに導かれて、迦膩色迦王の病室に入る。床上の病人の手をとり、頭をさすり、胸腹をなて、精しく其病狀を診察し、ま

づ冷水を求めて熱に惱める病人の頭腦をひやす。拆羅迦不圖顧みれば後に一人の丈高く相貌尋常人ならぬ美人の立てるあり、病人の容態を深く氣遣ひてや物尋ねたき目くばせなり。こは只人ならず王女迦摩羅伐地姫とて、迦膩色迦王の異腹の妹に當れり、而して拆羅迦とは相識なり。

拆羅迦徐かに耳語して曰ふ、『病態甚だ悪し、されど全く望を斷つほどにあらず。看護の人々は何處にあるか、王が是までの容子をも聞かまほし。』

此時二人の侍女來る。拆羅迦やがて次の間に退きて、精しく病の經過をたゞし、さて曰ふ、『父君の大王と第二の王子と共に同一の病魔に斃れ給ひぬ。迦膩色迦王子の病狀も亦相似の過程に在り、甚だ危し。されど吾等は以前の經驗によりて學びたる所を此に應用して、飲食用藥、今一層の注意を怠らざるべし。』



迦膩色迦王と拆羅迦とは同じ年輩にて、幼少の時より、學問に遊戲に頗る親しき間柄なりき。成人の頃ほひに、王は身を軍籍に入れ、拆羅迦は先帝の侍醫時縛伽につきて醫學を修めたり。良師の指導と弟子の精勵とによりて、修業の進歩著しく、數年ならずして拆羅迦は時縛伽の高足となり、醫界における名聲大に揚りぬ。迦膩色迦兼ねて此事を知り居たるより、父王の病革まれるとき、拆羅迦を勸めたれど容れられざりしが、今や自ら病瘵の人となるに及びて、直ちに舊友を呼び還して、其仁術に依頼せり。

拆羅迦、王女及び侍女等に看護の方法を示したる後、靜に病床の傍に坐を占めぬ。病人の夢穩かならず見えたるが、漸くにして目を開き、拆羅迦の傍に在るを見て、手を延ばし、何か物言はんとつとむる如く、拆羅迦直に之を制して曰ふ、『物靜かに休み給へ、殿下の命助からむ。』

迦膩色迦病苦を忍びて曰ふ、『われ靜かに休むべし、只必ず吾命を救へ、』

吾國家のためなり、吾一人はともあれ、『息つぎて王又云ふ』わがために摩登羅を呼べと、妹の姫に傳へ給はれ、彼は吾が最忠實にして勇悍なる大臣なり、』

摩登羅は乾陀羅貴族中の名流にて、長く王家に事へ老練忠義のものなり、今正さに城中に残れるを幸ひ、迦膩色迦は之を呼びて國事を托せんと思へり、やがて大臣召に應じて參上す、醫師拆羅迦の指圖を待ちて始めて室内に入り來る。

迦膩色迦乃ち身を傾けて摩登羅に向ひ、父王逝去以後の國情を説きたり、『長兄の王は正統の儲貳なれども、今や安息軍に交戦中にて宮中に在らず、守護の役は即ち吾が肩頭に掛れり、内政外交の宜しきを得るは吾が責任なり、汝は父君以來の老臣にして、其忠義は吾等の皆認むる所、病瘵の人たるわれは、汝を頼むの外なし、汝宜しく王兵を遣はして國境を侵さんとす、る摩竭陀の野武士共を壓迫せよ、されど又一方において



摩竭陀國王の威嚴と名譽とに訴へて、是等半ば獨立的の軍黨を彼の手にて鎮靜するやう、外交の術を盡すとをわするゝなかれ。』

かくて摩登羅は國事の整理に従ひ、拆羅迦と迦摩羅伐地とは病王の看護に専心せり、病勢革まる如く、をこたふる如く、一上一下して、其進行の尙未だ定まらざりし頃は、日夜の心配一方ならざりしが、病勢遂に其頂點に達し、生死の境此に分ると云ふ時、王は辛うじて之を凌ぎ得たり、これよりして病勢次第に衰へ、體力漸やく復したるも、其歩み頗る遅々、此時拆羅迦は食料の撰擇に全力を用ゐ、其益々健康を回復し、もはや危険の伴ふなきを見て、始めて病の癒えたるを報じたり。

時正に雨期に當れるより、干戈暫らく止み、乾陀羅の國民は少康を食るを得たり、迦膩色迦王の兄なる當の君主は、自ら大軍を率ゐて安息國の軍兵を一時に破らんと、諸部隊を集中して其機を窺ふ、此くして國の精兵外に在るを見て、摩竭陀國境の野武士共軍を整へ山を越へて攻め

來る、摩竭陀國王兵力充分ならずして、是等の野武士の跋扈を制する能はず、乾陀羅王の詰問に答へて、野武士等が此舉に出でたるは、正當の理由あるによる、迦膩色迦王にして相應の賠償を拂ひたらんには、彼等は自ら鎮るべしと曰ふ、是において迦王は決然開戦を布告し、永く山賊的侵襲に困しめる國境の壯俠を鍊りて摩竭陀國を伐つ。

## 第七章 迦膩色迦王

出師の準備將に成らんとするとき、安息國境より一大勝報來る、敵軍全く潰亂して復收拾すべからざりしも、味方の總大將なる乾陀羅國、當の君王は之がために討死を遂げたり、是において迦膩色迦王位に即き萬機を總攬す、安息國境は麾下の大將布沙伐那の指揮に一任し、國內の整理は大臣摩登羅に全權を委ね、王は自ら摩竭陀國侵入軍を總べ、拆羅迦を參謀となし、出陣の方略全く成りぬ。



拆羅迦と鳩摩羅伐地姫との間には、何時となく相思眷戀の情萌え出でぬ。姫は幼なき時より拆羅迦と相識れるが、さきに共に迦膩色迦王の病蔭に侍するや、拆羅迦の己れを忘れ精神を盡くして王兄を看護するを見るに、思慮あり、智恵あり、情あること、尋常一様の人に過ぐ、是よりして姫の心には彼に對して一種の敬愛の念を生じたり。今や相別れんとするに當り、姫懇ろに告げて曰ふ、「願はくは兄なる王の身を護りて、大任を全うし給へ」と。又笑を含みて曰ふ、「わがために御身も亦自愛せんを祈る」と。

拆羅迦茫然自失して言ふ所を知らず、たゞ面の赤らむを覺ゆるのみ。是において始めて彼が胸裡に一種の不可説の情緒の動きたるを自覺し、彼と王姫との間に解くべからざる因縁の早く既に結ばれたるを悟りぬ。されど拆羅迦は進んで王女の何心なく差し出だせる手を握りて、其意を通すべきか否かに迷ひぬ。彼は其事の果して正當なるべきか、然

らざるべきかを決し得ざりしなり。彼は小學校の生徒が先生に叱責せられて其爲す所を知らざるものゝ如く、舌根固着して言はんと欲する所を言ふ能はず、たゞ頭をたれて進退度を失する處、彼が平生に似ず、一場の懺悔を演じたり。

此時迦膩色迦王女に別を告げんとて入り来る、互に恙なく幸多からんことを祈り、王は拆羅迦とうちつれて出で立つ。

大王と名醫と轡を並べて、家郷を後に強敵を前に静々と打出づる道すがら、王は拆羅迦が王女の前にて涙ぐむばかり打萎れて居たるは何の故ぞと問ふ。拆羅迦云ふ、「吾實に過てり。王女訣別の時、吾始めて吾胸底に纏綿の情緒既に動けるを自知せり。王女も亦吾心を推して之に酬ゆるに似たり。これは其罪なるを知る、われは此誘惑を誓つて退けんとす、されどわが意の弱き逡巡して決する能はず、遂に涙をさへ流さんとしぬ。われいたく之を慚ぶ。」



王曰「卿は戀愛の情を罪なりと思へるか。」

拆羅迦獨棲は聖に到るの道ならずや、夫婦共棲は世間の事なり、放蕩淫佚の弊を拒くの一法に過ぎず。」

迦膩色迦王曰「卿は永く身を修道に委ねたれば、自ら高遊の識あらん、わが所説は一介俗人の見なり、深き哲理の上より來れるにはあらず。」  
拆羅迦長大息して曰「吾は遂に脱俗沙門の身となる能はず、わが長老尊者は吾胸裡に盤屈せる疑團を解き得ず、吾に勸めて摩竭陀に行き馬鳴尊者と云へる大知識に謁せよ」と曰ふ、彼は佛教當代の耆宿にして智徳比ひなしと傳ふ。」

「卿を惱ませる疑問とは何ぞ、卿か心にやましき所あるか」と王は問ふ、  
「わが心にやましき所あることなし、されどわが理想とする所、尙全く塵俗を離れざるが如し、われに情火あり、此胸底に燃ゆ、吾に理想あり、われを驅りて止まず、われは大事業を成さんと思ふ、天地を驚倒せんばか

りの偉功を樹てんと思ふ、又われは人生の意義を悟り、宇宙の秘機を看破し、其由て來る處、其究竟の處を知らんと欲す、吾心に一種捕捉し難き慾望あり、われは敢て爲ことあらんと欲す、他を利し世を利せんと欲す、天蓋ひ地載せ、日月運行し、草木發育する所以の根本に徹底し、此徹底の處より大力量を得て、吾本分を盡さんと欲す、われ既に此に生る、他日必ずこゝを去るの期あらん、されどわれは生前に生ありし如く死後に亦生あるを信す、固よりわれの前生は今生のわれと或る意味においては同一なること、昨日の我と今日の我と同一なるが如くなれど、又他の意味によれば大王のわれと異なる如く異なれりと曰ふべし、そはともあれ、吾は宇宙に磅礴せる一大生々の力によりて、過去に生まれ、現在に生まれ、將來に生るゝものと信す、業力と云ふは此生々の力に外ならず、わが此になす身口意の三業は偶然にして出づるにあらず、突如として去るにあらず、必ず過去に接し、未來に續くべし、而も現在の五蘊の結合は、



時節到來して離散せん、われは此、離散に先ちて三世を貫徹せる宇宙の大業力に透徹し、其運轉の妙、其活潑々地の玄機を捕捉し、以て安心立命の基礎を建立せんと願ふ。わが煩悶の所由は實に此に在り。』

・迦膩色迦王答へて曰く、『先きにわれ病める時生死の問題に考へ及びたることありき。吾夢に或る國の大王となる、三軍を統率して大に敵と戦ふ、彼潰亂して支ふる能はず、乃ち精兵をつくして急に追ふ、遂に頻死の敵將あり、狙撃してわが胸を射る、馬より落つ、乃ち遂に起つ能はざるを知る。されどわれはさまでの苦を覚えざりき。わが終焉の感想は、敗れて生存せんより、勝ちて死するに如かず』と云ふに在りき。夢醒めて後前額冷汗のしたゝるを覚え、何となく生れ變りたらん心地せり。當時我自身と眼前一切のものと、悉く煙の如く散り去りて無何有の郷に入りたる思あり。漸くして吾に還へるとき、さきの夢と今の幻想と全く本來實なるを知る。生死交謝のとき亦此の如きなきを得んや。此世に在りてこ

そ涅槃は空々寂々の無爲界に似たれども、此世なるものは一種の幻像界なるを思へば、空々寂々の處却て無始無終の實相界なるべし。』

拆羅迦曰ふ『陛下の所言亦一理あるに似たり。されど釋迦如來の教によれば、其所謂の空々寂々の涅槃なる者は、彼の世にて收得すべきものならず、變轉窮りなき此幻像界において直に捕捉すべしとなり。此不生不滅の本體に撞着したるものは、生死交謝の際において、眼動かす、神騒がす、何んとなれば、轉變の此生を辭するは有爲を蟬脱して無爲に歸るものなればなり。されど吾此に一種の疑なきを得ず。わが涅槃を願ふは此の現在の生涯において、益々活躍し、益々奮進せんが爲なり。』

『佛陀は此生を以て苦なりとなす、われも亦然か思ふ。而して彼は解脱の途を八正道に求め、人之に由りて歩まば涅槃に到達せんと教ふ。是れ大によし。されどわれは實に此有爲轉變の生を愛す、其苦なる處却て樂みあるを覺ゆ。即ちわれは愛の愛すべきを覺ゆ。愛は實に生々の源なり、



心に満足を與へ、力を添ふ。われは實に此世の愛に愛著するものなり。われは又英雄敢爲の氣象を愛す。われは勇士が一人を以て千軍萬馬を退けたるの氣概を喜ぶ。わが欲する所の智慧は、山林脫塵の智慧にあらずして、濟世利物の智慧なり。宇宙の諸元素諸勢力を意に任せて驅使する智慧なり。而かもわれは亦達識の高僧が山の如く動かざるの寂靜を羨む。われは涅槃無爲の平和にして福多きを好む。われに我執の念なし。たゞわれは此身が有する所の徳と力と智とを活用せんと思ふ。われは飛躍の處を欲す。

『わが胸中に盤屈せる是等諸種の欲望、理想、紛々として統一を缺く、これをもてわが胸頗る穩かならず。一點の光明の前途に横はるを覺えながら、之を捕捉するの便を知らず。われしばらく此光明を名づけて神となす。』

『われは實に如來在世のときに生れざりしを悲しむ。もし如來にして

今の世にあらば、われは直ちに彼處に到り、如上の疑問を以て親しく彼の教を請はん。わが心を苦しむる諸種の慾、諸種の分別、一切を擧げて彼が前に披露し、其所決によりて不退の信心を得ん。悲いかな。佛滅して以來既に五百年ならんとす。たゞ頼むべきは當時摩竭陀國に在る馬鳴尊者と云へる一代の名僧なり。佛滅以來の大徳と傳ふ。吾今唯一の望は彼處に往きて其教を請ふに在り。』

迦膩色迦王曰ふ『摩竭陀國の馬鳴尊者となし、われらは今其國と戦はんとするなり。されば彼をもつて戦捷の功賞となさむ。』

## 第八章 摩竭陀國

戦争の悲惨なるは言をまたざれど、時に其要なきにあらず。既に其避くべからざるを見れば、決然起ちて之に従ふは、國民の安寧と幸福とに責任ある人主の當に爲すべき所されど、之を敢行するに當りては、能ふた



け速かに之が局を結ぶをつとめざるべからず。徒らに戦捷の光榮に酔ひて、國民の不幸を顧みざる如きは斷じて避けんを要す。

迦膩色迦王の主義は實に此に在りき。故にこのたびの戦役も亦これを以て其行動の標準となしたり。王は出來得るだけ速に多數の兵士を徵集し、急進して野武士の本營を衝く。彼等防戦大につとめたれど、衆寡敵せざるが上に、不意の襲撃に遭ひたるをもつて遂に潰走せり。王乃ち要害の地を擇びて城塞を築き、一隊の將に命じて之を成らしめ、自分は深く進みて摩竭陀に入る。恒河附近の平野をつきぬけ、泥離及び舍衛の諸城を陥れ、急行直進して摩竭陀の城下に逼らんとす。

摩竭陀國王須跋曷事の急なるを見て、自ら大軍に將として迦毘羅伐率堵城外の平野に出で、迦膩色迦王の軍を迎へ戦ふ。轉戦數回、遂に利あらず。今や迦膩色迦王に壓迫せられて城内に退くより外なきに至りぬ。須王其遂に抵抗すべからざるを察し、使を北軍にやりて和を議す。

迦王之を容れ、三億金の賠償を要求す。されどこは摩國の富を擧げて償ふ能はざる所なるを以て、須王は媾和條件の尙寛大ならんを求む。迦王乃ち曰ふ、『王もし眞に和を求むるに意あらば、自ら出で、吾軍に來れ、相見て親しく和議を講すべし』と。

須王大臣及近衛の兵一隊を率ゐ、城を出で、北軍の本營に入る。王の來るや威儀堂々として、毫も敗將の態なく、恰も支那の君王と相會して親交を結ぶ人の如し。迦膩色迦王甚だ之を喜ばざりしも、尙敵將の從容として迫らざるの風あるに服しき。

迦王曰ふ、『卿は何が故に戦の始めに當りて、わが抗議を容れ給はざりしか。』

須王、『吾計畫の齟齬せるを如何にせん。われは始より平和をこそ圖りたれ、今日の事あるを期せざりしなり。野武士等は固より安息を貪るを厭へり。されど彼等は信實にして道心にさへ富めり。頭領のものらの上



申に任せ、われは彼等の復讐的行爲の正常なるを信じたり。われは彼等に對して穩當なる處置をとらんとして却て此敗戦を來すに至りぬ。内を定めんとし、却て外敵の侵襲を受くるに至りたるはわが悲む所なり。前門の狼を拒がんとし、後門の虎を入るゝこと、わが今の實驗に係る。」

迦王稍怒を含み、急に之を遮りて曰ふ、「こは郷が麾下を制するの力足らざるに由るのみ。もし卿にして賊に國を治むるの途に明ならば何ぞ今日の事あらん。卿の不明は卿が人君たるに適せざるを證すると謂ふべし。」

敗軍の將之をき、倏然として曰ふ、「大王、卿は勝者にしてわれは敗殘の囚人なり。わが身は卿が處置のまゝなり。されど天運もしわれに幸したらんには、卿とわれと其位地を換へて、わが卿を見ること猶ほ今日卿がわれを見る如くなるべし。たゞ異なる所は、われ内に顧みて愧づべき

なし。われは常に平和を事したり。われは嘗て故意に人を害ひたることなき。是のみ。まづ戦端をひらきたるは卿なり。卿が争を好むの心は今日の事局を醸したり。われ今卿が掌裡の人となる。生死固より卿が心のまゝなり。但吾死なば還つて後生の樂しむべきものあるべし。仰ぐべきは佛陀の功德なるかな。」

迦膩色迦王は、須跋睺王が這般放膽の言をなすをき、一方ならず驚き且つ怒りたるが、やがて心を鎮めつ、曰ひけるは、「わが先きに正當の所置あらんを申込めるとき、之を拒みたるは卿にあらずや。卿が不明なる人君たるの第一義は正義に在るをわすれたるか。」

摩竭陀王曰ふ、「人間第一の務めは得道に在り、而して之に到るの途は敬虔にありて愼悲にあらず。」

乾陀羅王は今や烈火の如く、怒りを抑へかねて曰ふ、「卿は山林出家の人となるに適して帝者の冠を戴くべからず。何ぞ人間不到の處に隠れ



去りて看經念佛に餘生を送らんとはせざる。王者の身に在りながら、王者の事を行ふ能はずば、敬虔を須めて何かせむ。遂に今日の事ある。一に卿が不明の致す所。人生の進運幸福は、決して卿の主義より來るべからず。」

摩竭陀王尙神色自若として毫しも騒かず、怒り罵る王の面を見んともせず曰ひけるは、「道を得ずして此世を得たりとて何かせむ。人生の禍福は夢の如し、榮枯盛衰われにおいて何かあらん。吾が得んと欲するは解脱の道にして此世の榮華にあらず。」

迦王之をきいて、須王の心中を度り兼ね、王の言ふがまゝに耳聳つ、王乃ち法句經を引きて曰ふ、

『金銀をもて飾れる大王の

車も遂に破るなり、

紅顔の青年も、

いつかは白髮の人ならむ、

たゞ世をへてかわらざるは

聖者の道徳是れのみぞ。』

乾陀羅王之をきいて、了りて、今は須跋蹉の剛毅不屈なるを嘆稱せざるを得ざりき。よりに言ひけるは、「われ今にして卿が誠に信心堅固の人なるを知る。されどわが見る所によれば、卿が信心は正鵠を離る。卿が解脱は空寂にして、卿が成道は充實ならず。人世は實に吾理想の眞偽精粗を甄別する奮闘場なり、而して此生は涅槃を成就圓滿すべき唯一の機會なり。されど今は這般の問題を稽查すべき時ならず、われは深く卿が諸訛を追窮せざるべし。われは先づ卿の位地を復舊して、卿をして其所懐を充分に吐かしめむ。われは卿が敬虔なる佛弟子なるを知る。卿が常に正義の道を踏まんとするものなるを疑はず。われは卿が眞率にして自ら曲げざるを貴ぶ。われは是より卿を遇するに親好なる友邦の君主を



以てすべし、故にわれは卿の位地を轉覆するを欲せず、されどわれは三億の償金を得ざるべからず、卿は君主の笏を執ることの舊の如くなれ、只われをして内外の大事ある毎に必ずわが意見を述べしめよ、卿は國政の料理において尙達せざる所あればなり。

『もし卿にして三億の償金の過當なるを主張せば、われは其必ず之に替るべきものを得んと欲す。まづわれに佛陀在世のとき親しく携へ給ひたる鉢を付與せられよ。次に人質となれる卿が身に替へて、高德の譽れ四天にかくれなき馬鳴尊者を我に得しめよ。』

敗軍の王、須跋跋曰ふ、『誠に佛鉢と馬鳴尊者とは三億の金にも優れり、されどわれは尙卿が條件の寛大にして和約の至當なるを喜ばざるを得ず。』

迦膩色迦王は是において須王の手を執りて曰く、『吾を以て寛大となすなかれ、わが老けたるは世事に在り而して是は必ずしも吾明智の致す

所にあらず、われは佛陀世尊の敎命を行政の上に應用して得たる所あるに過ぎず。』

## 第九章 馬鳴尊者

摩竭陀國と乾陀羅國との私約と、のひて四海また暫らく太平となるる其翌年の春、例に依りて世尊の誕生祭行なはれたるが、其賑しさは亦一入なりき、世尊入寂し玉ひてより此に五百又參年、佛燈益々赫きて四天全く靜謐、上下を擧げて其餘澤の治きに服しぬ。

迦膩色迦王は其計畫悉く圖に當れるより頗る得意の色ありしが、さりとして毫も傲岸人に驕るの態なく、客に接し、臣下に對する、總て溫柔懇切、彼れは今や實に全印度における最強國の君主として威風四隣を靡かせるなり、西北における安息國は、さき頃の敗北に一蹶してより復た起たず、摩竭陀國王は今や無二の同盟として利害を共にせるより恒河



附近一帯の地は、殆んど迦王の版圖に歸せる形あり。されど迦王をして此く勢力あらしめたるは、必ずしも王の畫策宜しきを得たるにあらず。又必ずしも王が將士貔貅の精銳無比なるにあらず。實に王が敵に對して寛大無我なるに由れるなり。されば隣邦の小君主等は何れも王の麾下に集り來りて王の意見をき、其の指揮に従ふを喜ばざるはなかりき。彼等は王の義に富み、正を愛し、仁を樂しむを信じて疑はざりしなり。此の如くにして佛教の主義を基礎として成れる一大王國は印度に建設せられぬ。國治まり、民安かに商工の業大に興り、外國との交易亦盛んに行はれ、希臘の文化は其美術を先導として乾陀羅國に入り來れり。是を印度における黄金時代の始まりとなす。佛陀の慈恩五天竺に普ねく、如來の正法深く人心に浸む。是を以て傳道弘法の精神大に興り、釋尊の聖教を全世界に宣布し、一切の衆生をして其恩澤に浴せしめんとす。北は西藏より、東は支那、朝鮮、日本に至り、西は阿富汗、波斯より地中海

に及び、南は錫蘭、緬甸、瓜哇に及ぶまで、佛日を仰がすと云ふことなし。

摩竭陀王と乾陀羅王とは今や無二の親友として同胞も管ならず、相伴ひて諸方の佛蹟を參拜す。先づ佛誕生の地たる蘭毘尼園に至りて其昔し麻耶夫人が曠世の偉人をして呱呱の聲を擧げしめたる時を偲ぶ。次に淨飯王の居城なる迦毘羅伐窣堵に至り、釋尊が尙悉達太子として早く既に其の異常の器なるを證したる處を訪ふ。それより更に佛陀伽耶に巡りて今尙鬱葱たる菩提樹の下に吾教祖が正覺成道し三界の大導師たるの資を全うし給へる時を追想して感懷轉深し。

是より兩王は波羅奈斯に歸り、四諦の法輪を始めて轉じ給へる鹿野園にて世尊の降誕會を祝ふ。此法輪轉じてより綿々として絶ゆる期なし。人方は云ふに及ばず、天上界の力と雖、亦之を左右すること能はず。一道の行列今や徐々として聖壇に近づき、聖紀念のためたてたる卒堵婆を巡りて進む。白衣にして花を捧げたる一隊の處女先驅とな



りて兩王之に次ぎ、衆僧經文を誦じ、香を焼きつゝ之が殿後をなす、風ゆたかに麗かに、四民集り來りて此盛典を拜觀するもの、佛陀の慈悲を感じ、仁君の盛徳を喜ばすと云ふことなし。

行道了はれるとき迦膩色迦王と須跋睺王と相並びて佛前に立ち、白衣の處女の一隊が花を献するを觀る。迦膩色迦私かに須跋睺に耳語して、『彼の先頭に立てる花の如き處女を誰となす』と問ふ、王曰く、『別人にあらず、わが唯一の愛女、跋陀羅室利姫なり。』

迦膩色迦つく／＼公主の容姿嬋娟無双なるに心を奪はれ、眸を凝して其一舉一動を見る、私に心に誓ひて曰ふ、『如來の加護によりて今日の事あるこそ難有けれ、もしわれにして尙干戈を動かすの凶運を避け得ざらしめば、いかでかかく太平の庇祐を樂むべき、王女もしわれを嫌はずば、われ必ず彼女を皇位に上せ、摩竭陀國王統の大母后となすべし、冀くは如來の冥護のいやまして吾等及び吾臣民の上に加はらんことを。』

奇なるかな吾等の胸底最も深き處に割據せる天地未分以前の此一大怨敵に對しては、如何なる蓋世の英雄と雖、直ちに兜をぬぎて降を乞はざるを得ず。

摩國と乾國との私約は此鹿野苑において法の如く確定せられ、百城にも替へ難しとせられたる佛鉢は須跋睺王の手より迦膩色迦王に傳へられ、又大徳馬鳴尊者は旅裝を整へて北行を急ぐべしとの王命に接したり。

馬鳴尊者召に應じ、宮廷よりまわされたる白馬の車に駕して來る。恭しく迦膩色迦王の前に出で、曰ひけるは、『如來の功德今に至りて愈々顯著なるを覺ゆるぞめでたき、われは陛下が敗敵に對して如何に寛大なるかを見て、心中の喜びを禁する能はず、今まで瞋恚の炎をのみ燃せる修羅の巷を轉一轉して、直に人天歡會の地となすこと、ひとへに吾が大王の徳に由る、願はくはわが祝福を享け給へ。』



迦膩色迦王曰ふ『善いかな、尊者の言や、もし吾が所爲に取るべきものあらば、われは如來の功德のいや高きを慶讃せんのみ。此身不肖なれども亦佛弟子の驥尾につらなる、因果應報の理において通せざる所なきにあらず、されど劣才寡聞、多く知る所なきを耻づ。吾友に拆羅迦なるものあり、深く教理を明らむ、而かも尙蓋奥の處において暗き處あり、疑雲未だ全くはれずと云ふ。わが尊者の下向を願はんとするは實にわれ等及びわが臣下の尊徳を慕ふこと深きに由る也。』

尊者曰ふ『陛下辭を卑うして、われを延請し給ふこと感泣の至りに堪へず、されど陛下の仁慈なる、わが頽齡の身を以て長途の旅に上るをゆるされんを冀ふ。われをして餘生を此に送らしめよ。われに闇那夜奢ビギナヤサと云へる弟子あり、能く經典に通じ、深く教義を究む、有徳の善知識なり。彼をして陛下に隨はしめむ。』

迦膩色迦乃ち拆羅迦を呼びて告げて曰ふ『われ等、波羅奈斯に俺留す

るの時日尙長かるべし、其間馬鳴尊者を招待して日夕會晤の機を得て法義をきかんと欲す。わがために尊者を屈請するの準備をなせ。』

## 第十章 法身佛

一夕迦膩色迦王拆羅迦と共に馬鳴尊者に侍しけるとき、大王悠然として尋ねて曰ふ『尊者、願はくは吾がために説け、われ等が佛陀を崇敬禮拜するは其人格にあるか、はた其神格にあるか。』

尊者曰ふ『佛陀は人にあらず、神にあらず、神人を超絶す、何となれば佛陀は萬徳具足圓滿の相なればなり。われ等が佛陀を尊崇するは其智慧に在り、其徳相にあり、眞諦を徹見するの般若力と、之を俗諦の上に活動せしむる慈悲の本願力とに在り、人の人たる、天の天たる、神の神たる、皆この二つを有するに由らずと云ふとなし、眞諦は古今を通じて不變なり、平等なり、俗諦の世界のみ時々生死す、神人と雖此數をまぬかるを



得ず。』

拆羅迦遮りて曰ふ、『吾等が謂ふ所の神とは諸天を云ふにあらず、一神の本體を直に指せるなり。敢て問ふ、佛陀は此點につきて如何なる垂教あるべきか。』

迦膩色迦之を補ひて曰ふ、『わら等の神とは梵天の如き、唯有の體を言ふにあらず、又自在天の如き、個人的天地の主宰及び創造者を言ふにあらず。われらは慈悲、智恵、功德、正義の源泉を以て神となす。尊者は此の如きものゝ存在を説き玉ふか。はたこれを以て夢幻泡影となし玉ふか。もし實在なりとせんに、われらは如何にして之を知り得るか。』

馬鳴曰ふ、『此の如きは一朝一夕の説話の盡くす所にあらず、されど略して之を言ふに、此の如き本源は確かに實在なり。此の實在は萬有の上、に如來の善法として現前し、一切の有情を一步々々進めて大覺の境に到らしむ。此善法を領得する者は正道に入る、われらは此法の本體を名

づけて法身佛となす、大日如來となす、無量光となす。一切法の儀表となり、一切の善を進め、一切の惡を挫く、皆因果應報の理に順はずと云ふことなし。』

此時大王問て曰ふ、『さらば、吾等は生れながらにして佛陀たるにあらず、佛道を成するに由りて佛陀となる、是か。』

馬鳴尊者曰く、『寔に王の言の如し、眞諦は妄念の所造にあらず、眞諦は本來法爾としてあり、佛性は不生不滅なり、不増不減なり、必ずしも修して而して後得るにあらず、されど修なしとして之を明めんこと難し、明め得て之を見る、即身成佛なり。されど此成佛の本體は色聲香味觸の色身にあらず、吾等もし此肉眼をもて之を見んとせば、毫釐千里を誤らむ。故に佛在世の頃、人之を見て其眞佛たるを知らざるものあり、佛性を色身の上に求めたればなり。佛滅後數百年、而して却て釋尊の現前を悟るものあり、佛性を超色界に認めたればなり。』



拆羅迦問ふ「さらば法身佛も亦梵天と同じく、唯有の本體たるなきか。」  
 馬鳴尊者曰ふ「梵天は、唯有の本體を人性化したるものなり、されど法身佛は一切法の儀表なり、軌範なり、法身佛は一切法を該攝して、之に業を與へ、之に因縁を付し、色心の二法界に因果應報の理をして、顯然一絲の亂るゝものなからしむ。諸の法性を壞せずして、其菩提ラレヨナリキを成せしめ、法と非法とを分別して、聖諦第一義の歸する所を明にし、無漏の戒を持して十波羅密の源泉となり、平等の願に違はずして而かも差別の行に順ふものは法身佛の活用なり、無量光佛の妙力なり、釋迦牟尼世尊は、嘗て此靈佛より、一條の光明を假り來りてわれらを照し玉へり、煌耀、明亮、今に尙其返照を見る、されど無量光の妙用は吾佛陀にてつきたるにあらず。閻部州外到る處、菩提の光明輝かすと云ふことなし、之を感ずるものは即ち佛陀なり、大覺者なり、人天の導師なり、而して盡十方に遍滿せるもの、之を無量光法身佛の性徳となす。」

拆羅迦問ふ「現世界そのまゝと法性の妙用とは區別すべきに似たり、三毒五欲の生涯は菩提圓滿の發動にあらざるべし、此存在と之をして波羅密の戒行に攝せしむる法體とは、果して同一に看做すべきか、是において一大疑難なり、吾等今日の生涯そのものが敗闕にあらざるか、眼に色を見耳に聲を聞く、そのことが根本において一大過失なるなきか、果して然らんには此生を享受するは咎なり、此れを昂進し、増長し、繼承せるは非法なり、而して夫婦の愛男女の情は正しく後悔の因縁となるべし。」

馬鳴尊者答へて曰ふ「志高き若ものよ、如來の大法を會得して、如法に分別し行動せよ、吾は汝が眼を見て汝が胸裡の秘密を洞察す、われ能く汝が此問を發する所以を知れり。」

「至善の徳たる必ずしも有の中に存せず、亦能く無の中に在り、至善の徳を呼びて天中天となし、一神となし、法身となし、無量光となし、法身佛



となし、眞如實際となり、一なる一切となし、無始無終となし、萬法該攝の法となし、無爲となし、大空となし、畢竟空となし、大寂滅となし、言語道斷となし、心行所滅となす、汝が意に任せて之を呼べ、而して其實際リテリヤイなるは一念の疑を容るゝを許さず、頂門に一隻眼を具へて之を見んを要す、これ一切法本來必具の妙徳にして、疎に入り、細に入り、色に入り、心に入る、薫香の氣の見るべからず、捉ふべからずして、而かも薫染せずと云ふことなきが如し、一切平等にして高下なきは、法は大千世界に遍満す、一法の微と雖、此理の妙用を避くべからず、頭出頭没、日夜に此理と親しむ、須臾も離るべからず、一頑石あり、直に此物を取り來りて法身佛となし、難きも、之を通じて其光明を仰ぐべし、故に又之を如來藏と云ふ、萬法此に入りて差別の相を取り、因縁の業力を得來る。

『法身佛に平等と差別との二相あるをわするべからず、差別は平等の具象化したるなり、而して平等は差別の相を定む、彼と此とを分ちて而

かも其同じき處を失はざらしむる、之を平等即差別、差別即平等となす、平等を離れて差別を求む、これ惡平等なり、差別を離れて平等を求む、これ惡差別なり、而して差別は無明に始まる、現實界は無明の返照なり、而して此無明あるがために平等の法身、具體化せられ、一切の法、現實となる、平等のみを存せば無に偏す、寂滅爲樂ありて努力精進なきは中道にあらず、是をもつて此生を享受する必ずしも誦訛となさず、夫婦相愛し、男女相慕ふ亦咎むべきなし、三毒五欲の生涯は差別を執し、我を執するより生ず、まづ無明の本體を看破して、直ちに之を無量光佛の妙用となさん、を要す、涅槃の蓮華は煩惱の淤泥に生ずと云ふもの此意に外ならず。

『世尊が婆羅門徒の所説に倣ひて梵天、又は天中天、又は常一主宰の神を教へ玉はざりしは、凡愚のこれを以た個體化し、有情化するを察し玉へばなり、佛性の本體、如來の性徳、衆生本具の妙用は、決して這個有爲的



ならず、我的ならず、その朦朧的、幻影的ならざるは言を待たず、もし幻影に似たる「我」なるものなきを知らば、幻影的なる神なるものなきを悟るべし。』

拆迦羅曰ふ、『われ今にして佛陀の眞意を解し得たるを謝す。吾嘗て往々に佛陀を挾みて或は阿難尊者と迦葉尊者、或は文殊菩薩と普賢菩薩、或は勢至と觀音とを描けるを見て、其意の深きを悟らざりしが、今吾師の所教にして其義を領し得たり。平等の智慧は差別の慈悲によりて動き、差別の慈悲は平等の智慧によりて明かなり。智ありて悲なければ空に偏し、悲ありて智なければ情に迷ふ。悲智圓満して上求菩提下化衆生の實全きを得ると云ふべし。果して然るか。』

馬鳴尊者之を肯ひて曰ふ、『卿が言當れり。要は中道實相を履んで進むに在り。難行苦行を以て道を求むるものは愈々道を離る。吾等は個體的我にあらず。故に一身の解脱を計り、個我の化度を願ふは正教と違反せ

り。影をのみ逐ふもの何れの時に體を得んや。衆生無邊誓願度。われ等個々に一切衆生をして無明の繫縛より離れしめざるべからず。わが茲に在るはわがためにあらず、一切有情のためなり。彼を救ふに由りて我始めて解脱す。故に我教は弘誓の舟なり、一切を擧げて之に乗らしめて彼岸に達せんと期す。吾教の大乗たるは此處に在り。われは偏空孤寂の教化を捨て、わが解脱の途を一切衆生の化度の裡に求む。』

拆迦羅之をきゝて歡喜措く能はず。合掌禮拜して曰ふ、『尊者、われは此教によりて一大光明の吾胸にひらめくを覺ゆ。感泣何にか譬へん。われさきに安心立命の處を得んとして山寺に退き、しばらく方外の人となりしも、胸底一種抑へ難きものあり、必ずしも我に熱し、情に馳するとにあらず。されどわれは此生を樂しみ、此世を愛し、爲すあらんことを思ひ、濟世の事を遂げんと欲す。これを以てわれは復た塵世の人となれり。われさきに迦膩色迦王の病を看護して盡くす所あり、又機にふれて、國政



の上にわが所思を述ぶることあり、吾は如來の弟子として世のために裨益ある身とならんと思ふ。是の故にわれは俗に還りて、一家の計營をなし、日常差別の上に、紛雜なる俗務の上に、法身の平等を觀し、菩提の妙徳を發揚せんことを勉めんと欲す。尊者われを肯ひ給ふか。」

馬鳴尊者曰ふ、『必ずしも俗情を斥くる勿れ、必ずしも日常差別の中を恐るゝなかれ。要は眞諦と俗諦との圓融無碍なるを期するに在り、平等の妙は千差萬別の裡にのみ現はる。菩提の徳相は餓えて食ひ、渴して飲む處にのみ顯然するにあらず。國を愛し、家を愛し、智を進め、義を守り、渴して盜泉の水を飲まざる處、武士は食はねど高楊枝なる處に最も活躍するを見る。たゞ生きて動くこと蠶の如きは、佛弟子たるもの、敢て爲さざる所。此生を増長し、昂進するは其分量においてせずして、其實質においてせざるべからず。徒らに情を縦にして我執の念を熾んらしむるは禽獸の事。人間の靈を以て、自ら辱かしむること、此の如くなるべか

らず。存任そのものにおいて何等の收闕なし。眼の色を視る、耳の聲を聽く。此の處において靈性の閃めくを看取し、貪欲を涅槃となし、我慢を菩提となし、愚痴を般若となすの作用あらんを要す。男女相親み、夫婦相和し、親子相愛する處に、道光を認めて、弘誓の願力を全うし、解脱の彼岸に達せんことをつとむる、之を達人の日用底となす。』

栴維迦曰ふ、『果して尊教の如くならば、われは如來の俗弟子として、迦膩色迦王の妹夫たらんことを期すべし。』

馬鳴尊者莞爾として曰ふ、『われ夙に卿の胸中を知れり。乃ち歸りて公主と伉儷の式をなせ、われは卿が如來の冥護によりて其福壽の彌やましに永からんを禱る。佛陀の所説は寂滅にあらず、枯木寒巖に倚るが如きにあらず、わが靈性をして我執の桎梏をはなれて、悲智の二徳を圓満にするに在り。佛教は家を捨て、俗縁を斷つ處にあらずして、之を靈化する處にあり、生々の妙用を害するにあらずして、無明を除き、懈怠を退り、



曠志を去り、而して常樂我淨の大涅槃を此に現成し、圓滿し、われと衆生と共に法身無量光佛の性徳を完うする在り。」

尊者良くして又曰ふ、『眞諦の光明輝くにつれて一切の因縁、一切の業報悉く菩提の種子とならずと云ふことなし。一切の有情は言ふも更なり、一切の非常も亦成佛解脱の曙光を望まんとして進化、發展暫くも休まず、仰ぐべきは如來の功徳なるかな。』

爾時迦膩色迦王尊者に謝して曰ふ、『大徳の慈悲、われらをして能く佛陀の光明に浴せしむ。遍十方の法身無量光佛、願はくばわれを加護して、一切の衆生と共に成佛解脱せしめ玉へ。』

王又摩竭陀王を顧みて曰ふ、『わが敬愛せる大王よ、卿は尙われに負ふ所あり。馬鳴尊者は頽齡の故を以て、われと共に北行するを辭し玉へり。されば卿はわがために尙適宜の人質を擇ばざるべからず。もし王女跋陀羅室利姫にしてわが望を許さば、われは彼を尊者に代つて乾陀羅國

に伴はんと思ふ。卿が意いかん。』

摩竭陀王答へて曰はく、『大王、唯命のまゝなり。王女も亦深く卿が勇悍にして、度量あり、人情あり、策略あるに服せり。卿を以てわが家國の大恩人と思へる王女なれば、いかでか卿の望に背かんや。この崇敬の念を一轉して眷戀綿々の情となすは、單へに卿が力となす。』

## 第十一章 叛黨

是れより馬鳴尊者は日々迦膩色迦王のために法話を打す。席に連るものは拆羅迦須跋睺王の外、王女跋陀羅室利姫なりき。

ある日のこと、須跋睺王は國事のために忙がはしくてか、期に後れて入り來りしが、其面色何となく平常の如くならず、胸中たゞならぬ感情の動けるに似たり。

迦膩色迦王之を見て曰ふ、『大王、何事の起りてか、かくは平生の沈毅に



似もやらず、其面色さへたゞならざるぞ、大王の親族中に何等の凶事か起りたる。如何なればかく憂慮措く能はざるものあるか。』

須跋喉王答へて曰ふ、『吾親しき大王よ、凶事は將に御身の上に落ち來らんとする也。わが此に來るは如何にして此の凶變を避けんとてなり、正しからぬ愛國の情に動されて、わが部下の將士等は大王を擒にせんとの隠謀を企て、今や殆んど成熟せるもの、如し、近頃期に後れて南方より朝貢を齎し來りたる諸將軍、わが大臣と相謀りて此宮殿を圍み、大王を擒にして、乾陀羅の軍兵を不意に襲撃せんとす。此等一切の計畫極めて秘密に行なはれたるが上に、大王のわれを信するの厚きを利用して、宮中の護衛を次第に入れ替へ、今は殆んど全く彼等の手兵を以てせり。萬般の畫策悉く成り、たゞ最後の合圖をまつのみ、而してわれもし彼等の隠謀に與せずば、直にわれに逼りて王位を他に譲らしめんとすと云ふ。』

迦膩色迦王神色自若として少しも騒がず、恰も閑棋を圍めるもの、如し、徐かに口を開きて、『此際に處する大王の意向は何れにあるか。』と問ふ。

須跋喉王もどかしく思ひて、『わが意向とな、われは義務の果たすべきあるを見るのみ、われは御身を救ふべし、然らざれば御身と共に死なぬのみ。』と云ふ。

迦膩色迦王は言に訥にして、行に敏なる人なりき、王直ちに拆羅迦に命じて樓閣の上に高く青色旗を掲げしむ。こは兼て不意の變あらんとし、近衛の將卒を呼び集むる暗號なりしなり。四方の宮門皆既に叛徒の手に歸せるを知り、迦王は須王に謀りて隠謀の主なる大臣閻耶多ヂヤヤタを事なげに呼び來らしむ。

閻耶多の召に應じて、入り來るや、迦膩色迦王は喜んで之を迎へ、坐を與へて歡話せしむ。まづ彼が忠勤無二なるを賞し、他日大に之に酬ゆる



機あらんことを望むなど、こまくと打解けて物語る。さながら平生無事の時、怒濤廻瀾の今や近かつかんとするを知らざるもの、如し。

此くして大王は何事なく時の過ぐるを待ち居たるに、閼耶多は心も心ならず、宮庭の處にて、時刻今や來るか、と待ち伏せる諸將を思ひ遣り、冷汗背をうるほすを禁せず、如何にして、此場をのがれんかと、左視右顧しつゝありしを見て、大王は事もなげに閼耶多に彼が起居を問ひ、家族の消息を問ひ、兄弟姉妹の有無を問ふなど、悠々閑々たるを見て、大臣遂に堪へ難くやありけん、『大王陛下、わが御前を退くを許し給へ。南方へ各州より來れる諸將軍のわれを見んとて外廷に待てるあり、彼等は皆其地方における人材なり、吾國王陛下も亦彼等に謁見を賜はらんとす。』と云ふ。

迦膩色迦王更に面を和げて、『われも亦卿と共に南方の諸將を見るを得んか。わが結盟の隣君たる須跋曠大王麾下の勇士は、やがて吾が親好

の同盟ならずや』と曰ふ。言語慇懃、拒まんやうなし。閼耶多進退窮まりて策の出づる所を知らず、仰いで王の面を見るに、温容依然として平生の如く、而かも其中に凜乎として犯すべからざるものあり、彼は覺えず眼を側め首を俛して、迦王の命のまゝに坐を起ち、先導して外廷に出でんとす。

迦膩色迦王又曰く、『卿暫く待て、われ獨り行かんは事の宜しきに稱はず、須跋曠王も亦坐に在らざるべからず、わが乾陀羅國の諸將も亦われに待して、卿及び新到の諸勇士と會見せんを欲すべし、これ諸士を禮遇するの道なり。』

是時閣上青色旗の舉れるを見て、附近の陣營より駈け集れる乾陀羅軍の勇將、城門に來り、其召に應じて國王に謁見せんとするものなるを告げて、入城を求む、衛士之を内に報じて、而る後、其城内に入るを許す。

王諸將を延見して、其速かに來れるを嘉みし、且つ曰ふ、『われ是より摩



竭陀國王及び大臣閻耶多と共に新たに南方より着せる諸名將を見んとす。汝等諸將は吾に隨ひて來れ。麾下の士卒は各部署に従ひて、更に命あるを待つべし。』

乾陀羅と摩竭陀との兩國王、大臣諸將を隨へ威儀堂々として謁見の室に入り來る。南部地方の諸將皆此堂に在りて閻耶多の合圖今や遲しと待ち居たるが何事ぞ、敵王自ら悠然として國王及諸臣と共に此に現はれたるのみならず、隱謀の主人なる大臣自ら居所の羊の如く●●として來らんとは、彼等呆然として爲す所を知らず、唯事の成行を待つのみ。

迦膩色迦王は溫容を以て諸將に接し、まづ今日の會見あるを喜び、それより諸將の勇悍にして能く君に事へ、國に忠なるを獎し、兩國一旦不幸にして、戦端を開くの已むを得ざるものありしも、其事既に過ぎ去りて、今や兩國間の親交全く固く定まりて動かすべからず、從來仇讐の念

ありしものは、宜しく此際釋尊の金言を服して昔日の怨を一掃することなどを説き、結ぶに法句經の一偈を以てす、其偈に曰く、

『怨を解くは怨にあらず、

唯愛のみありて之をよくす、

吾世太古よりの格言は是れ。』

此偈を誦し了りて、迦膩色迦王一座を見わたしたるに、諸將尙安からざる面色ありて、敵愾の心未だ解けざるものあるに似たり。之に加ふるに味方の軍勢尙未だ必ずしも敵を壓倒するほどにあらざるを察し、今暫しの餘裕を得んものと思ひ、諸將各自に謁見を興へ、了りて又一條の話を始む。

『此く多衆が一堂に會せる好機會を利用して、われは一般政略の方針をこゝに説明せんと思ふ。そは他にあらず、われは釋迦牟尼世尊の一弟子としてわが國政の上にも其教理を應用せんとす、即ち怨を解くは怨



にあらずして愛にあり』と云ふを以てわが政治の根本主義となさんと欲す。固より戦争の避くべからざるものあらば、われら決して之を避けざるべし。干戈をとり、幕直に進んで敵陣を陥れん。要する所は正に堂々として出處進退丈夫の如くなるに在り。かの戦息み、私約成るの後に、おいて、尙舊時の怨仇を忘るゝ能はず。隠謀密計によりて、他を陥れんとするが如きは、苟も佛徳の何たるを知り、勇士の本分を解するもの、敢て爲さざる所。己を空うして、他を容れ、怨をわすれて、交を厚うし、自ら卑うして、徳に歸するは、當に其人の善良なるを證するのみならず、併せて其賢明なるを證す。卿等嘗て釋尊が拍賞彌コトギミの僧衆のために説き玉へる永哀王と其子長命太子とに關する一條の物語を記せるなるべし。』

〔此語は佛陀の福音中に在り、つきて見よ。〕

迦膩色迦王は元來談話の術に長せるより、此物語を了れるときは、滿堂の聽衆さながら魅せられたる如く、全く王が手中のものとなりぬ。

此時四面の城下より集り來れる乾陀羅の將士、宮城にみちくゝて、今や一令の下に動かんとす。

王之を見て時機既に熟したりとなし、猶ほ大人が群少を誨ゆるが如く、靜かに曰ふ、『わが政策は上述の如し、わが欲する所は隣交を厚うし、國民の幸福を増進せんとするに在り。されど此にわが政策を破らんとて、隠謀を企つるものありとせよ。世尊の金言を蹂躪して、怨に怨を重ねるの痴をなさんとするものありとせよ。われらは當に何を以て此等の徒に酬ゆべきか。』

王首を轉じて大臣閻耶多を熟視して問ふ、『わが友なる閻耶多大臣、此際に處する卿が意見はいか。ん。われは只管卿の幸多からんを祈るものなるに、卿は何とてわれを害せんとはする。われは卿及び卿が一味の徒黨を處するに何を以てすべきか。』

閻耶多此に至りて、只一條の遁路あるのみ、王の前に出で、恐惶頓首し



て曰ふ『陛下の智と徳とはわが世尊に似て高明なり、深廣なり、吾罪免るゝ所なし、われはたゞ陛下の慈悲亦能く世尊に似て、われをして幸に刑戮の辱をまぬかれしめ給はんを願ふ。』

迦膩色迦王默然として言はず、徐ろに眼を轉じて他の諸將を見る、彼等亦遁るべきなきを知り、一同打ち連れて王の前に出で、頓首し、拜跪し、陳謝して罪を乞ふ。

王、馬鳴尊者の亦座に連なれるを見て、恭しく近寄りて曰ふ『尊者、わが此際に處する方法は如何なるべきか、一國に君臨するもの、其麾下の叛逆者を如何にして處罰すべきか、如來の大慈を倣ひて、すべて彼等を許し放つが是か、尊者の智徳乞ふ之を決せよ。』

尊者、『われは一介の沙門に過ぎず、卿は大國の君主なり、卿自ら處決をなせ、されどわれは思ふ、慈悲の種子は空しく不毛の地に落つることなかるべしと。』

大王、『尊者、われは高教を多謝す、何人をも怨まざるは徳の最も高きものなること、是れ如來の金言なり、萬世を経て更ふべからず、されど不肖を以て一國に君臨す、蒼生の幸福を進むるを以て政治の大綱となさるべからず、而して法官の第一主義は義理を正すに在り、善を賞し惡を罰するに在り、此主義をわが現在の事件に應用するに、もし閻耶多大臣一味の叛逆をして漫に其私慾を逞うするに止まらしめば、其罪死に當るは言を俟たず、されど、非理ながらも愛國の精神に驅られて事の此に至れるものなるを見れば、大臣の隱謀も亦全然に非議すべからず。

『さらば起て、大臣及び諸勇將、卿等にして若し爾來自ら欺かず、他を輕んせず、憎怨を去り愛樂を旨とするを誓はゞ、われは卿等と親好なるを喜ぶべし、摩竭陀國と乾陀羅國と唇齒相倚り輔車相たすけなば、百世の太平期すべく、蒼生の利福益々大なるべし、國君の望これに越えたるはなし。』



## 第十二章 虎狩

迦膩色迦王の優然として玉座を去りて、内殿に引き退くや、諸將相見  
て長夜の夢の覺めたる如く、始めて自家の位地に思ひ到り、又大王の英  
邁非凡にして而かも仁慈の情一方ならぬを讚嘆し、今は心からして忠  
實をぬきんでんものと覺悟したり。

此時須跋睺王の夏の宮と定められたる瑜珈城の留守役より使者來  
着し、城の内外に多少の猛虎徘徊し、人畜を殺傷すること甚しく、庶民之  
がために堵に安んぜざらんとするを以て、一隊の兵卒と象群とを分遣  
せられんことを乞ふ。南方の諸將之を傳へき、て一齊に「是れ好機なり、  
願はくばわれら虎狩を催ふして、一は迦膩色迦大王を欸待するの意を  
表し、一はわれら平生の養武の精神を試むべし。此機逸すべからず」と、須  
跋睺王に乞ふ。

須跋■王乃ち之を許し、諸勇將をして虎狩の先鋒とならしめ、其夕結  
車を整へて、直に出發せしむ。自ら王は迦膩色迦王を導きて、次の日早く  
出城すること、定めぬ。拆羅迦は迦王の命によりて城に留まる。尙不平  
の徒の事を好むもの、虚に乗じて叛旗を翻すあらんを恐れてなり。

拆羅迦、馬鳴尊者と共に高樓の上より虎狩隊の出發を見送り、ついで  
尊者に問ふ。尊者、われは昨日の一伍一什を自ら見聞し、大に悟る所あり。  
數年を山寺に過して得る所よりも更に大なるを覺ゆ。實地の觀察より  
得る所は讀經誦偈に優るものあるに似たり。知らず、世間幾多の紛紜葛  
藤、たゞ自家胸中の未だ充分に徹底せざるより來るを、吉凶禍福、畢竟す  
るにわが自ら招く所ならざらんや。然るに此に一條の質疑すべきもの  
有り。もし法身無量光佛にして一切智を有し、慈悲無邊、精進無窮の法界  
を造成し、一切衆生の運命を司どる者ならば、何とて此世をして本來無  
苦無憂のものならしめざりしか。四聖諦の第一は生を以て苦の始まり



## 第十二章 虎狩

迦膩色迦王の優然として玉座を去りて、内殿に引き退くや、諸將相見  
て長夜の夢の覺めたる如く、始めて自家の位地に思ひ到り、又大王の英  
邁非凡にして而かも仁慈の情一方ならぬを讚嘆し、今は心からして忠  
實をぬきんでんものと覺悟したり。

此時須跋睺王の夏の宮と定められたる瑜珈城の留守役より使者來  
着し、城の内外に多少の猛虎徘徊し、人畜を殺傷すること甚しく、庶民之  
がために塔に安んぜざらんとするを以て、一隊の兵卒と象群とを分遣  
せられんことを乞ふ、南方の諸將之を傳へき、て一齊に「是れ好機なり、  
願はくばわれら虎狩を催ふして、一は迦膩色迦大王を欸待するの意を  
表し、一はわれら平生の養武の精神を試むべし。此機逸すべからず」と須  
跋睺王に乞ふ。

須跋王乃ち之を許し、諸勇將をして虎狩の先鋒とならしめ、其夕結  
車を整へて、直に出發せしむ。自ら王は迦膩色迦王を導きて、次の日早く  
出城すること、定めぬ。拆羅迦は迦王の命によりて城に留まる。尙不平  
の徒の事を好むもの、虚に乗じて叛旗を翻すあらんを恐れてなり。

拆羅迦、馬鳴尊者と共に高樓の上より虎狩隊の出發を見送り、ついで  
尊者に問ふ、尊者、われは昨日の一伍一什を自ら見聞し、大に悟る所あり。  
數年を山寺に過して得る所よりも更に大なるを覺ゆ。實地の觀察より  
得る所は、讀經誦偈に優るものあるに似たり。知らず、世間幾多の紛紜葛  
藤、たゞ自家胸中の未だ充分に徹底せざるより來るを、吉凶禍福、畢竟す  
るにわが自ら招く所ならざらんや。然るに此に一條の質疑すべきもの  
有り。もし法身無量光佛にして一切智を有し、慈悲無邊、精進無窮の、法界  
を造成し、一切衆生の運命を司とる者ならば、何とて此世をして本來無  
苦無憂のものならしめざりしか。四聖諦の第一は生を以て苦の始まり



となす、これによりて見れば、如何に自己を窮め去りたりとて此生の續かん限りは苦海に浮沈せざるべからず、其上大慈大悲の法身佛は何とて無辜の民が其自ら招く所ならざる禍害に苦しむことあるを救ひ給はざるか、是れ法身佛の本願力と相容れざるに似たり、尊者、願はくば吾ために此疑を解き給へ。」

馬鳴尊者曰ふ、「わが有爲の友よ、第一苦諦の義は苟も心あるもの、皆信認して疑はざる所、離合集散變じて止まざるは生の相なり、故に一喜一憂環の端なきに似たるは吾世の常數なり、轉變の相をはなれて、此生あらんことを冀ふ、これ因果を撥無するなり、四諦の理は嚴然として明鏡の物を照すに似て、毫釐の疑を容れず、しかも此の如しと雖、一切の衆生は此苦界に頭出頭没するの故を以て、法身佛大悲の本願を非議すべき權利なし、衆生の存在は衆生自らの業感に由る、彼等の今日は彼等が無始劫來の所爲の權化なるに過ぎず、善因善果惡因惡果、觀面にして

犯すべからず、わが業はわが作る所なり、而して其果はわれ自ら感ず、因縁應報の理數は器界に行はるゝのみならず、實に亦心界の原則なり。

『法身佛は一切有情の光明なり、われら此光明を前途に認めて進む、法身佛はわれらを苦海の浮沈より救ひて彼岸の寂靜に導く、浮沈するはわれらの自業なり、寂靜の涅槃に至らしむるは法身佛の願力なり、而かも此光明の願力を悟らざるものあり、此の如きは不覺の迷闇に出入して究竟歸着の處を會せず、煩惱泥中の人となり、了る、もしそれ然らずして頂門に一隻眼を有するものは、生死の大海に浮沈して、而かも法身佛常在の處を知る、苦必ずしも苦ならず、樂必ずしも樂ならず、何となれば彼は生死の根本的意義に徹底したればなり。

『法身佛の徳たる甘雨の沛然として大地を潤ふすが如し、其雨たるは一なり、而して草木禾穀各其機類に従ひて生殖す、草は草たり、木は木たり、禾穀は禾穀たり、黎樹に黎實成り、杏樹に杏子成り、椰子樹に椰子熟す、



其他芭蕉、棗子、無花樹、石榴等各其類に隨ひて果實を結ぶこと異なれり。法身佛の平等普遍なること甘雨の一味平等なるに似たり、而して衆生各其根機を異にするが故に此法身佛を實現すること亦各同じからず。共同じからざるは衆生の業感の千差萬別無量なるに在り。

而して衆生の業力は無明の一念より起る。此一念に動かされて各其因縁を結成し、業果を感受す。明あり、不明あり、徳あり、不徳あり、皆是衆生自作の現象なり。法身佛平等の本體は糸毫の損益消長を知らず、本來の光明燦耀として三千大千世界を照破す、衆生之を仰ぎて其歸趣を知り、安心立命の地を定の、精進不退の信を成就す。

『法身佛に我執なし、他の崇敬を求めず、他の景仰を望まず、かれは嫉妬の神にあらざればなり、彼は自在天にあらす、帝釋天にあらす、婆羅門天にあらざればなり、法身無量光佛は一切萬法の據りて以て則となす處。萬法之れに由りて動くが故に因縁業報歷然として亂るべからず、四時

行はれ、萬物成り、禽飛んで天に戻り、魚躍りて淵に在り、千差萬別の中を貫きて、琴瑟相和する底の消息、隠々として見るべきは法身佛の用なり、惡の必ず罰せられ、善の必ず賞せらるゝ、世を隔て、而してたがわざるは法身佛の徳力自ら然ればなり。一切萬法悉く此永遠の則によりて動かすこと云ふことなし。故に無量光の法身は一切諸天を超越す。

『われ等は法身の所造にあらず、自業自得の果報なり。而して此果報を來たす所以の原動は、無明の業力に在ると、わがさきに説く所、されど其動くや來る處なく、止まる處なし、法爾として此の如し。業力の發動も、無明の一念にありと雖、其一たび萬法の上に顯はるゝや、忽ち法身佛の本願に攝取せられて、一起一伏、一動一靜、悉く其法力に導かれて進退すること、孩兒が慈母に撫育せられ、嚴父に訓練せらるゝが如し。故に法身佛は一切衆生の父にして所造者にあらず。

『拆羅迦、汝試に自ら問ひて見よ、汝の此に生存するは他に能造者ある



が爲なるか、はた然らざるか、己れは自業自得を以てわが今日あるを知ると云ふを以て理ありと信ず。一切衆生此に在り、何んとなれば唯心の所造によりて一念發動したれば也。

『汝の今日あるは法身佛本來の願力によりて、しかあらざるべからざればなり、されば汝の明日は汝が此願力に縁りてかくあれと欲するに任せて、亦しかあるべきはづなり。』

『もし此に自在天あり、汝を造り成したりとせよ、汝は其手を擧げ其足を投ぐる處において、決して活殺自在の妙機を感得し得ざるべし、汝は猶ほ陶人がつくねたる瓶の如けん、動かんと欲して動く能はず、止まらんと欲して止まる能はず、不自在是より大なるはなけむ。』

拆羅迦乃ち問ひて曰ふ、『尊者、われもし此生を樂まんと欲し、しかするに決定をしたりとせば、われ果して之がために苦業を成就するとすべしや。』

尊者曰ふ、『因果の法は歴然として在り、而して苦樂は猶ほ鐘錘の如し、上ることあれば必ず下ることあり、一高一低は錘の錘なる所以を成す、もし錘をして一處不動ならしめんか、其錘の用や空しと云ふべし、生の樂をのみ享受して其苦を避けんこと、苟も生くるもの、能くする所にあらず、汝もし人生の歡樂を盡さんと思はば、又能く其憂苦に耐ふるの決心なかるべからず、樂を樂しみ、苦を苦しむ處に人生の妙用現はる。死は至善にあらず、生は至惡にあらず、要は生死を超越して、法身佛本來の願力を成就するに在り、吾教祖世尊の生涯之を證して餘りあり、生を厭はず、死を嫌はず、樂むべきを樂しみ、苦しむべきを苦しみ、優然として有爲轉變の中に處し給ひたるは、誠に其聖なる所以なり。』

『拆羅迦、順境を以て善人がうくる賞與となし、逆境を以て惡人が受くる處罰となさしむるなかれ、法界には賞罰なし、たゞ因果あるのみ、地獄の苛責も自ら招けるなり、淨土の歡樂も自ら致せるなり、もし天上に物



あり、衆生の善行悪業を見て、之に賞罰を配合すること、君主の臣民におけるが如きものと思ひなせば、大に錯了也。譬喩と事實とは之を明かに區別せざるべからず。如來の戒法は命令にあらず、之を犯したりとて如來の處罰をうくることなく、之を守りたりとて如來の褒賞をうくることなし。賞と罰とは他より受くるに有らずして自ら招くなり。

『佛法の究竟は衆生無邊誓願度、煩惱無盡誓願斷、法門無量誓願學、佛道無上誓願成』に在り、自ら救はんと欲せば先づ他を救へ、利他なくして自利あることなし。自利々他覺行圓滿に至りて佛道全し。』

### 第十三章 法身佛と梵天

迦膩色迦王が尙菩提城に虎狩を觀んとて滯留せる時、拆羅迦を王宮に尋ね來るものあり、彼は波羅奈斯市の附近における一院主なるが、拆羅迦によりて王の保護を得んと欲せるなり、その故は院主曰く、『われ等

が庵のほとりに溼婆寺あり、村人の參詣するもの、多く彼處に行きて、われ等を顧みず、之が爲めに同坊の衆僧往々にして日要の給養を得る能はざることあり、溼婆宗の如き外道の爲めに如來の正法を崇信する我等が困しむとは理にかなはず。』

拆羅迦『ならば貴僧は如何にせんと欲せらるゝか。』

院主『わが望む所は此の溼婆寺を他處に移さんとするに在り、彼の外道寺だになくば、村人悉く吾道の信者となり、吾等の供養充實するに至るべし。傳へきく、卿はわが僧團の一人なりと、願はくばわれらのために一臂の力を假し給ひて、かの外道を放逐せんことこそ願はしけれ。』

馬鳴尊者も以前より此座に加はり居たるが、院主の願をきいて曰ひけるは『貴僧の志はさることながら、其望は須跋●王及び迦膩色迦王の共に相關涉し給はぬ處なるべし。其故如何となれば、教門の事は各自のまに、其機に隨ひて信すべく、上より彼此言ふべきものならざれ



ばなり、涅槃宗の信者、たとひ眞諦は外れたるにせよ、其道を求むるにおいては、摯實なるべく、苟も他人を迫害せざるにおいては、其自由を蹂躪すべからず、外道と雖、其道によりては、濟世に益なからんや。』

此時、座に亦婆羅門徒の一大臣ありけるが、大に馬鳴尊者の意見を喜び、教門の事に關しては、阿育大王が取りたる寛容政略に如くなしと曰ひ、更に進んで尋ぬらく、『卿等佛敎徒も亦婆羅門宗の如く、一切の造物者を信じ、これを以て全法界を主宰する一大我識となすにあらずや、或は自在天と曰ひ、或は●婆天と曰ひ、或は法身佛と云ひ、或は無量光天と曰ふ、其名こそ相違すれ、其實においては同一實諦ならずや。』

馬鳴尊者之をき、頭を左右に打ふりて曰ふ、『わが婆羅門の道友よ、わが見る所にては、然らず、無上の妙法之を大慈大悲の如來となし、無量光の法身佛となす。一切の儀表となり、軌範となり、眞諦究竟の處となり、因果應報の根蒂となる。此ものは自在天にあらず、●婆天にあらず、婆羅門

天にあらず、而して法身無量光佛の諸天に異なる所は實に此點にありて存せり。自在天は我執の天化したるなり、故に諸人の崇信と慶讃とを要求し、然かせざるものは之に冥罰を加ふ、之に反して法身佛の本願は慈悲なり、我執なく、愚痴なし、たゞ一切衆生の解脱成佛せんことを願ひ、其迷闇を去りて光明に攝取せられんことを願ひ、其正道を踏みて妙法の指導に従はんことを願ふ、自在天は或る意味において嫉妬の神なり、彼は其意に背くものを以て罪業となし、信者の祈願を受け、讚嘆を喜ぶ、法身佛は則ちこれに異れり、必ずしも祈願を受けず、崇敬を喜ばず、慶讃をきかず、而かも衆生其道を誤りて迷闇に赴けば、正法此に破壊せらる、法身佛之を見て憂心樂しむことなし、是れ自ら悲しむにあらず、衆生の迷蒙必ず業報を成熟するときあるべければなり、法身無量光佛が大慈大悲の本願は、一切の有情非情を攝取して捨てず、必ず之を涅槃解脱の正道に還して、已まんとす、法身佛は一切の父なり、而して一切の衆生各



ばなり、淫婆宗の信者、たとひ眞諦は外れたるにせよ、其道を求むるにおいては、熱質なるべく、苟も他人を迫害せざるにおいては、其自由を踏躪すべからず、外道と雖、其道によりては、濟世に益なからんや。』

此時座に亦婆羅門徒の一大臣ありけるが、大に馬鳴尊者の意見を喜び、教門の事に關しては、阿育大王が取りたる寛容政略に如くなしと曰ひ、更に進んで尋ぬらく、『卿等佛教徒も亦婆羅門宗の如く、一切の造物者を信じ、これを以て全法界を主宰する一大我識となすにあらずや、或は自在天と曰ひ、或は●婆天と曰ひ、或は法身佛と云ひ、或は無量光天と曰ふ、其名こそ相違すれ、其實においては同一實諦ならずや。』

馬鳴尊者之をき、頭を左右に打ふりて曰ふ、『わが婆羅門の道友よ、わが見る所にては、然らず、無上の妙法之を大慈大悲の如來となし、無量光の法身佛となす、一切の儀表となり、軌範となり、眞諦究竟の處となり、因果應報の根蒂となる。此ものは自在天にあらず、●婆天にあらず、婆羅門

天にあらず、而して法身無量光佛の諸天に異なる所は實に此點にありて存せり、自在天は我執の天化したるなり、故に諸人の崇信と慶讃とを要求し、然かせざるものは之に冥罰を加ふ、之に反して法身佛の本願は慈悲なり、我執なく、愚痴なし、たゞ一切衆生の解脱成佛せんことを願ひ、其迷闇を去りて光明に攝取せられんことを願ひ、其正道を蹈みて妙法の指導に従はんことを願ふ、自在天は或る意味において嫉妬の神なり、彼は其意に背くものを以て罪業となし、信者の祈願を受け、讃嘆を喜ぶ、法身佛は則ちこれに異れり、必ずしも祈願を受けず、崇敬を喜ばず、慶讃をきかず、而かも衆生其道を誤りて迷闇に赴けば、正法此に破壊せらる、法身佛之を見て憂心樂しむことなし、是れ自ら悲しむにあらず、衆生の迷蒙必ず業報を成熟するときあるべければなり、法身無量光佛が大慈大悲の本願は、一切の有情非情を攝取して捨てず、必ず之を涅槃解脱の正道に還して、已まんとす、法身佛は一切の父なり、而して一切の衆生各



其心に法身佛の隻影をうつすが故に、其子となる。』

婆羅門宗の大臣曰ふ、『われも亦自在天又は婆羅門天又は天地獨有の神と云ふべきものは、吾等衆生の如き人格にあらざるべきを思ふ、彼は超人格なり、されど此超人格は受想識を離れたるものにあらざるべし、故にわれは佛教徒が法身佛を以て自覺の識なきものとなすを肯ふ能はず、佛教の修道は誠に高し、誠に尊し、されど人間の道德を以て宇宙に越えたるものなしとすべきか、われは思ふ、梵天の法性は有爲轉變を離れたるが故に、五蘊所造の有情以上に在り、無上甚深の法喜禪脱は此絶對的法體と冥合し、一致するより來らざるべからず、而して此法體は不知不可知とも云ふべく、又自在天とも云ふべく、又梵天とも謂ふべし、彼は吠陀の聖書に自ら啓示せり、而して彼は信者の祈願を受け、慶讃をきき、崇敬を喜ぶ。』

馬鳴尊者之をききて曰ふ、『われ尙壯なりし頃、われも亦婆羅門天の信

徒なりき、われは梵天を以て無上の存在と信じ、一切法界の創造者主宰者と信じたり、われは梵天宗の頗る濟世に益あるを知る、而してわが之を捨て、佛道に歸したるは梵天宗の非なるにあらずして、如來宗の更に優れたるものを知ればなり、われを以て之を見るに、如來宗は廣大にして深遠なり、何となればわが存在の由て來る所、究竟する所を説き得て明瞭なるは如來教に如くものなく、而して其實地の上において濟生利物に益ある、亦此教に及ぶものなければなり。

『如來の所説は總て實地を離れず、梵天宗の如き架空の臆説をのみ逞うするに比すべからず、卿は梵天と冥合せんと曰ふ、而かも其梵天の本體とは如何なるものぞ、之を説明せんとせば、議論百出して底止する所を知らざるべく、何となれば梵天は一個の概念に過ぎず、抽象的思索の所造に過ぎざればなり、彼は一切處に存在し、而して定處あることなし、捕捉すべく、而して捕捉すべからず、有無茫漠として決せざるは、總て空



想的産物の特質となす。故に佛陀は這般夢幻の影像を逐ふものを喻へて、十字街頭に梯子を立て、虚空裡の幻城に攀ちんとするものとなす。攀づるもの其幻城の何れにあるを見る能はず、其如何にして成れるを知らず、又實に其實有なりや否やを知らず、吠陀の道士は吠陀を以て聖書となし、而して此の聖書を述べたる著者の教権を信憑す、而して此等の著者は梵天を以て最後の教宗となす。猶ほ一盲衆盲を率ゐて循環して端なきが如し、而して曰ふ、解脱を得んと欲せば梵天を崇敬せよ、梵天を禮讚せよ、梵天に祈禱せよと、梵天宗は嬰兒宗なり、大人には適せず、其説く所高尚にして深遠なるに似たれど、眞諦此に在らず、僅に其幻影を映するのみ、如來は此種の宗徒を以て猿猴の水月を捉へんとするに喩ふ、何となれば彼等は實をわすれて虚に走ればなり。」

婆羅門大臣答へて曰ふ、「若し尊者の所見を許すとせば、尊者の法身無量光佛も亦梵天と同一様の非難を受くるわけならずや、彼と此と何の

差別かある、同じく絶對の存在に與へたる名なるなきか。」

尊者曰ふ、「もし法身佛と梵天と異名同體ならんには、卿が所説の如くならむ。されど普通の解釋によれば梵天は實在を總攝せる名にして、法身は轉迷開悟の菩提なり、吾佛教徒の誓願は此存在を永續せんとするにあらずして、眞諦を體得し、正法に徹底し、清淨心を現成するに在り。

『法身無量光佛は永遠無窮の光明なり、一切を攝受する靈光なり、而して此靈光は嚴然たる實際にして、人智の直ちに認得し得べき所とす何人もこの世に眞諦あり、是非の分るゝ所以のもの、存するを疑ふ能はず。る以上は、法身佛の存在に喙を容るべき餘地なし。われらは未だ法身佛の全般に涉りて其知を究めたりと謂ひ難かるべし。われらの智慧は限り、われらの徳行は未だ圓滿ならず、されど法身の存在はわれらが既に知る所、行ひ得る所の上に立てり。梵天の存在が抽象的思索、架空的臆想の裡より來るが如くならず、法身は實に會得すべし、梵天が無に出で



、無に入ると同一視すべからず。

『法身は決定して有限の意識にあらず、法身は實に永劫の理元なり、遍在の法諦なり、無窮の軌範なり、個體的存在の制限を超越す、故に其源底を臆測すべからず、而して衆生日夜に之を用るに盡くることなく、缺くことなし、法身は實に無量の功德を具有せり。』

『われ等は法身無量光佛の妙體を盡くす能はざれど、假りに三身を立して之を説く、一には法身一切の萬法此れより生じ、一切の善行これより起り、一切の因果これより始まる、道の本元にして智の究竟なり、二は報身一切の萬法此に還り一切の善行こゝに圓滿し、一切の因果こゝに終る、進化の成就する所有情の成佛する所なり、第三を應身となす、平等の法身が千差萬別の境界に應じて、無窮の力用を現するの相なり。』

『法身佛の性相功德たる實に無量不可思議なる上述の如し、されば將來に來らんとする哲學者、科學者、詩人など云ふもの、此法身佛の光影中に

盡くすべからざる妙用の發動を、或は感得し或は認識して、歡喜措かざるものあらむ、實に如來宗は架空の思索にあらず、落漠たる神話にあらず、人生の活問題と直に連關す、されど又敢て詩人の幻想を拒まず、理家の窮を排せず。』

婆羅門問ひて曰ふ、『されど如何にして這般多くの矛盾せる思想を融化して、無量光法身佛中に渾一し得べきか。』

馬鳴尊者曰ふ、『吾嘗て吾師波奢婆尊者バシヤウにきける一條の譬喩あり、能く一と多、平等と差別との關係を説明して盡くせるあるを覺ゆ、試みに之を語らんか。』

衆皆うなづきて聞かんことを乞ふ。

## 第十四章 象物語

馬鳴尊者乃ち諸人の望を容れ白象の物語を始じむ。



『その昔し見事なる大象ありき、其色白く、強大なる鼻と美はしく長き牙を有し、従順にして能く主人の命令を奉じ、さまざまの仕事に従ひたり。あるとき其良主人に伴はれて盲人島に來りたるが、其評判忽ち全島に擴がりぬ、曰く「見事なる大象此島に來れり、獸群の王、其剛勇なる、其智恵ある、其柔順にして能く人意を解する誠に獸群の王なり、吾等往きて之を見ざるべからず、是れにおいて島中の賢者、長者、學者など争ひ集りて大象の如何なるものなるかを検査せんとす。」

『その後、幾何もなくして、大象の島を去るや、彼等打ち寄りて獸王を詳論す。或るもの曰く象は恰も大蛇に似たりと、或るもの曰く象はしかく大ならず、蛇の稍々大なるものに似たりと曰は、過なからんと。此の一人は象鼻に觸れ、他の一人は象尾を握れるなりき、其脚にふれたる者は曰く象は高き柱に似たりと、其胴に達せるのは曰く大桶を數層倍したるが如しと、其皮膚をのみなでたるものは曰く象は平滑にして堅し

と、或は又曰ふ象は麥を打つ棒に似たり、曰く彼は箕に似たりと、こは象牙と象耳とに觸れたるものなるべし。

『此の如くにして衆盲各、其意見を異にしたるが、何れも自家の説を以て是とせざるはなく、他を排斥し、攻撃し、辨難し、論駁して措かず、甚しきに至りては他を罵倒し、嘲笑する外、これを以て虚偽欺騙の徒となし、異端邪道となし、其必ず地獄に入ること火を賭るよりも明かなるべきを曰ふ。

『されど衆盲各自家の實驗を以て其が議論の基礎となせるは疑ふべからず、而して彼等の之を主張するに當りて何れも正直自ら欺かざるは論なし。是において彼等各々徒を結び、派を樹て、相互に辨駁、論難すること、實に吾等各宗派の學者、論者の口角沫を飛ばして是非を争ふが如かりきと曰ふ、今これを大象の主人よりして見るに衆盲の論象、各其真相の一斑を窺ひ知るものなるは疑なけれども、此一斑を以て全班を



推し究めんとするが故に、是非得失紛々として岐る、止まる所を知らざるなり。

『又衆盲の色を辨別する能はざるや、大象の乳白にして頗る美しきを見るを得ざりき、されどわれは彼れを以て自ら欺き他を欺かんとするものとなす能はず、何となれば彼等は自力の限りに於いて真相を知らんと勉められたればなり。』

『如來は即ち此の大象の飼主なり、彼は三藐三菩提を成就し、福智圓滿の境に到り給へり、彼は無上の眞諦なる白象を群盲の中に伴ひ、其批判にまかせ給ふ。此の眞諦なる白象は力用と智恵と信とを表はせり、如來の所説を奉せんものは即ち眞諦の全豹を悟る、諸宗諸派の爭論は眞諦の一隅を擧ぐるに過ぎざればなり、一切の反駁、矛盾は如來の正法に入りて渾融して一となる。之を信するものは他の徒らに哮々として喧争を事とするもの、所爲を學ばず。』

馬鳴尊者此一條の物語を終へたる時、兩大王正に虎狩より歸城すとの報傳はる。乃ち一座の人之を城門に迎へ、其無事に凶獸を射止め得たるを祝す。一行中に滿身花をもて飾れる騎馬武者あり、こは南方より來れる勇將の一人にて、虎狩に第一番の功名したるもの也。拆羅迦これに近づきて曰ふ、『われは卿の光榮を祝す、もしさきに一步を誤まらしめば、何ぞ今日の事あるを得んや、禍の轉じて福となること、誠に佛陀の冥護に由ると云ふべし。』

馬鳴尊者亦之に和して曰ふ、『善いかな、拆羅述、われは此に亦佛智のひらくるを見る。此存在の尊ぶべきは存在そのもの、爲めならず、此存在によりて達すべき目的の尊きに由る。人生の目的はたゞ生きんとてに、あらず、生死は晝夜の交謝するに似たり、たゞそれ等をして正道により、慈悲を行ひ、菩提に精進せしめよ、生と死とは問ふ所にあらず、如來の金言に曰く



『もろくの善を奉け行へ、  
もろくの悪は作すことなかれ、  
自ら其心を淨うする、  
是れを諸佛の教とす。』

### 第十五章 好耦一雙

拆羅迦は馬鳴尊者の教訓を承けてより、日夜國事のひまある毎に、潜思黙考して其意義を體得し、次第に如來宗の真相に悟入するを得るに至りたれば、從來の疑團悉く解散し、胸裡自ら清涼を覺え、日常受用の處において自在を得たり。彼は其天賦の到底出塵的沙門の生涯に適すべからざるを知り、永く俗に還ることに決心しぬ。よりにこれを馬鳴尊者に謀りたるに、尊者も亦拆羅迦の意見に同じ、人生の眞面目を發揮せんは僧と俗と擇ぶ所なきを説く。

是において迦膩色迦王は使を本國に遣り、公主迦摩羅伐地姫を呼ばしむ。

公主來るや、直に拆羅迦と嫁娶の事あり、迦膩色迦王と跋陀羅室利姫との婚禮と同時に舉行せらるべき旨公表せらる。是に至りてわがこの小説話は終局に達せる也。  
馬鳴尊者其式を結ぶに當り、左の頌を誦す。

『世に福なるは母たるに在り、  
世に福なるは父たるに在り、  
世に福なるは道を守るに在り、  
梵行の人も亦然り。』

『一生持戒のものは福なり、  
信心決定のものは福なり、  
智恵具足のもののは福なり、



諸姻作すなきものは福なり。』

婚婚の大禮の式終るや、迦膩色迦王大に宴を設けて群臣に賜ふ。大王拆羅迦を顧みて曰く、『われは卿がまた俗に歸りて、國家のため、回生の魔術家。こは王が私かに拆羅迦に與へたる、純名なり』となれるを祝す。われは固より出家沙門の徳高きを欣ぶものなれど、わが妹婿にして莫逆の友たる卿が、世を捨て、山林の人となるを見るに忍びざりき。たとひ卿なくとも、僧界には多士濟々たるべし。而かも俗界には卿の如き回生の魔法に長せるもの、一口もなかるべからず。』

拆羅迦之を否みて曰ふ、『わが術は魔法と異れり。われはたゞ觀察と實驗とに基きて、性の自然に順はんと勉むるのみ』と。されど拆羅迦が回生死の妙術は、實に觀る人聞く人をして魔法かとはばかり思はしむるものありき。大王の彼を呼びて魔法家となせるは極めて肯綮に中るを覺ゆ。されど魔法の妙も回生の仁術の實利なるには如かず。

この芽出度き禪宴に列れるもの、多く拆羅迦の妙術を讀して止まざりければ、拆羅迦又之に答へて曰ふ、『わが知未だ博からず、わが術未だ熟せず、何ぞ敢て諸君の賞讃に當らむ。わが教祖如來が菩提の法輪を轉じ給ひてより、此に數百年、われらが勤めは其光明を求め、其教義を擴め、其功德を大にするに在り。如來の本願は無窮なり、其力量は無限なり、此無窮無限の寶庫を有せるわが世界は、後來這裡いかばかり怪奇の發見をなし得べきかを豫知すべからず。吾術、吾知の如き、もとより敢て言ふに足らず。

『わが見る所によれば、科學上の發明、發見如何に大ならんも、之に過ぎて尙大なるは、佛陀の慈悲を人生實地の上に應用して、昔からんを期するに在り。之を家族の上に施し、政治の上に實用し、社交、國交の上に行ひ得るのみならず、一切の有情非情の上に施して、而して過ちなきを見るに及びて、吾生の究竟に達すと云ふべし。われらは法身無量光佛の菩提



のうちに解脱を求むるを以て、亦わが回生術の本分となさんと思ふ。願はくはわれらをして、悉く佛陀の功德の大なるを讃せしめよ。

『日は日中にかいやき』

月は夜にかいやき。

武士は鎧にかいやき。

而して佛陀は日々夜々、

時として輝かずと云ふことなし。』

### 阿彌陀佛終

明治三十九年十月六日印刷  
同 三十九年十月十三日發行

(定價金卅五錢)



編輯者兼

高島

東京市小石川區原町六番地

發行者

山中

東京市京橋區築地二丁目卅番地

印刷者

中村

東京市京橋區日吉町十番地

印刷所

近藤

東京市京橋區日吉町十番地

發行發賣所

鶏聲

東京市小石川區原町六番地

同

井瀨堂

東京市京橋區築地二丁目卅番地

關西賣捌所

會社

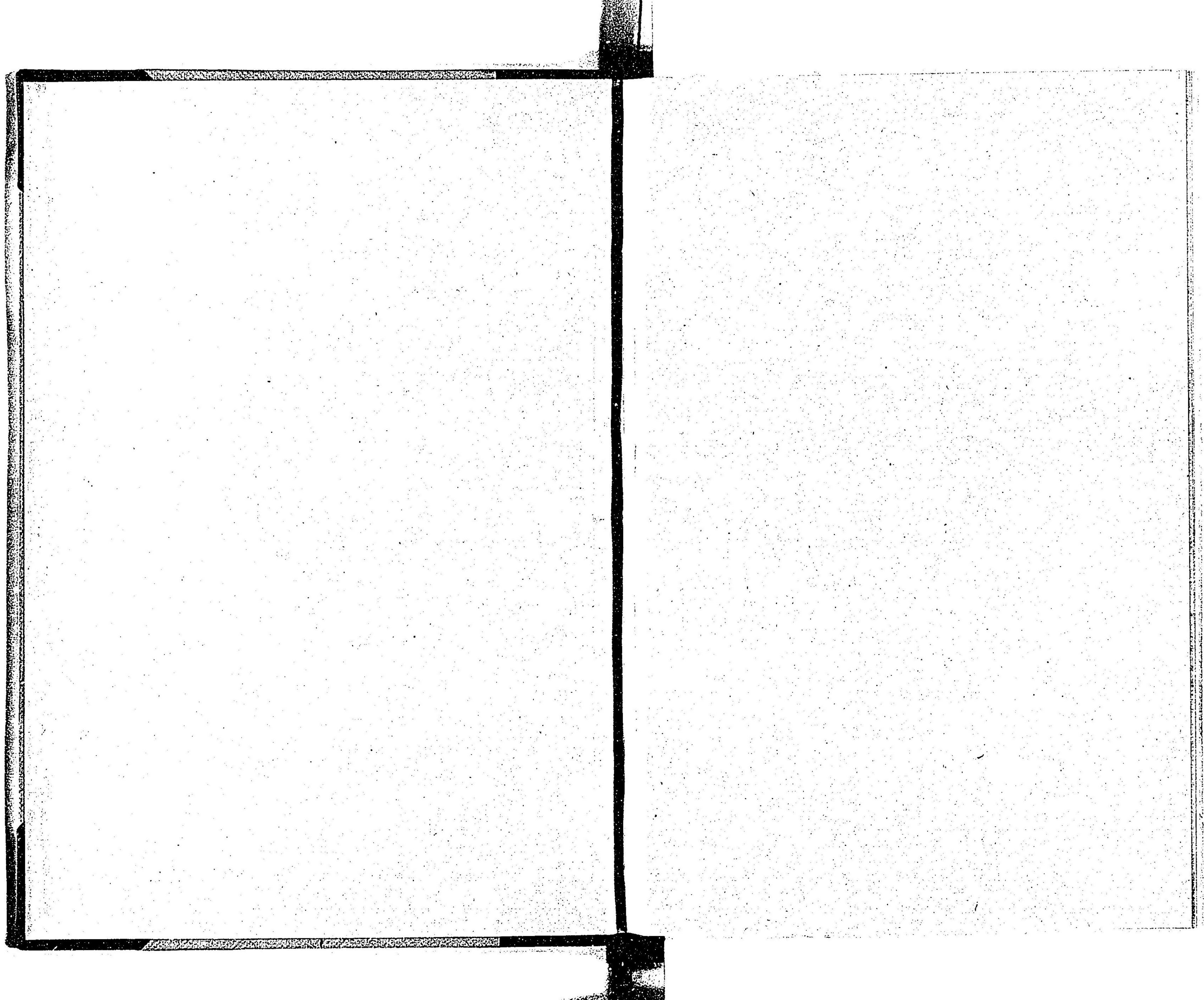
大坂市東區南本町四丁目

丙午出版社藏版

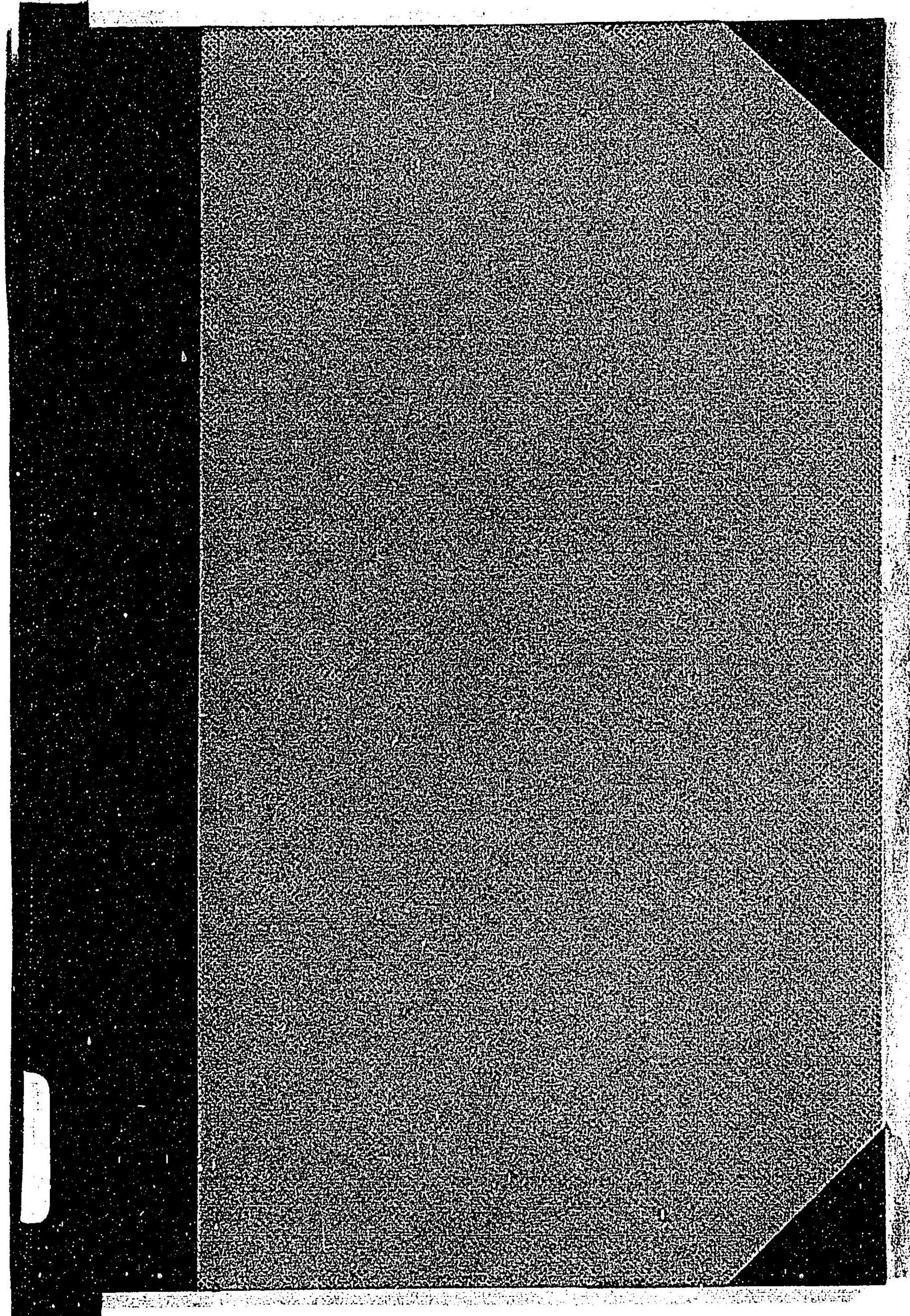


2900











324

14

014719-000-3

324-14

阿弥陀仏

ポール・ケーラス/著

M39

ABC-0005





86.12.25